

Title	学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎 藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.10 (1935. 10) ,p.1437(41)- 1506(110)
JaLC DOI	10.14991/001.19351000-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351000-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351000-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 學生生活の思想的方面の一調査

——學生生活調査第二報告——

奥井復太郎  
藤林敬三

## 内容

- 一、はしがき
  - 二、本論の目的と調査の基礎數字
  - 三、學生の卒業後の方針
  - 四、學生の好む學業方面
  - 五、學生の愛讀書
  - 六、學生の購讀せる新聞及び雜誌
  - 七、學生の好む知名の人物
  - 八、學生の時事問題に對する態度
  - 九、結論
- 學生生活の思想的方面の一調査

筆者達が此處に報告しやうとするものは、去る六月本塾、經、法、文の三學部の本科及び高等部の學生に就いて行つた「學生生活調査」中、數項目を摘出し、その結果の集計に基づく調査からなる。元來右の「學生生活調査」は、(1)身上事項、(2)生活事項、(3)學資の三部に分たれ、合計二十數項目を含む稍々廣泛な調査であるが、今此處では僅かに左の數項目の結果に就いて論述しやうとするに過ぎない。本論をば「學生生活の思想的方面」と稱したのは、左の諸項目が各々學生の思想生活を窺ふのに多少の資料を提供するからである。

「學生生活調査」中此處に選ばれた諸項目は次ぎの如きものである。

- (一) 父兄の職業。
- (二) 卒業後の方針。
- (三) 學業。(a)興味ある科目、(b)加入せる學會、研究會、(c)學部以外に通學する學校、講習會等。
- (四) 愛讀書。(a)文學、(b)宗教、(c)政治、經濟、社會、(d)自然科學の四方面。
- (五) (a)購讀新聞、(b)購讀雜誌。
- (六) 好む知名の人物。(a)學界、(b)政界、(c)實業界の三方面。
- (七) 最近最も興味を惹ける時事問題とそれに對する態度。

この數年來學生の思想問題は絶へず世間の關心を惹き、これが調査研究に對しては既に相當の努力が繰り返され、

また學生思想調査の試案なるものが一部に企てられてゐるやうである。これ等の努力に對して最初に斷つて置かねばならないのは、云ふまでもなく本研究は、元來單に學生の思想調査を目的としたものでなく、學生の生活狀態全般の調査を目的とした「學生生活調査」(奥井試案)の結果の一部分の利用に基づいたものに過ぎない。従つて學生の思想調査としては、この「學生生活調査」以外に尙ほ他に利用して有効であると思はれる資料が容易に得られたのではあるが、暫らくそれを考慮外に置くこととする。また學生の思想調査としては右に選んだ諸項目を以つて充分であるとは、素より筆者達の考へてゐない所であつて、今後同様の「學生生活調査」が繰返さるゝ際にはこの目的のために尙ほ諸項目の添加、修正を必要であるとさへ考へてゐる。更らに今回の「學生生活調査」中右に選んだ諸項目以外に利用し得べき項目があるし、また學生生活の思想的方面と雖も彼等の生活環境、彼等の生活態度の全般と切り離すことの出来ないものである以上、右の諸項目以外に他の諸項目を參考にすることが素より望ましい。しかしこの點は「學生生活調査」の結果の整理の完成を以つて補つて行き度と思ふ。

## 二

「學生生活調査」中前項に選んだ諸項目の集計は種々なる標準に従つて行はれ得るし、また色々な標準から各項目の集計を求めることが望ましいのは云ふまでもない。最初に最も普通には學生の所屬する學部(及び科)並に學年を標準とする統計が求められる。しかしこの種の集計は「學生生活調査」の完成に讓ることゝし、順序を些か逆轉して、學生の思想生活の調査に關して、筆者達は最初に(1)父兄の職業別並に(2)卒業後の方針の如何が、學生の

思想生活に如何に關聯するかを、見やうと試みた。即ち學生の家庭生活の一環境條件である父兄の職業上の差別が彼等の思想生活に果して重大な影響を有するか否か、また彼等の卒業後の將來の目的が現在の彼等の生活の思想的方面に如何に反映されてゐるか、この二つの問題が先づ筆者達の關心を強く惹いた。しかし不幸にして第二の問題はこれを暫らく斷念せざるを得なかつた。それは、後にも述べるやうに、卒業後の方針に關する學生の回答記述が指示の不充分のためであつたか、甚だ不充分の結果しか得られなかつたからである。かくて今此處に問題とするものは單に右の第一の問題に限られざるを得なかつた。本論に題して「學生生活の思想的方面の一調査」と謂ふ所以である。

先づ本研究の基本的調査として、學生の父兄の職業に關する集計の結果を示せば第一表の如くである。

第一表に就いて二三の注意を附加して置くことが必要である。職業別分類は大體吾國の第二回國勢調査に於ける職業分類に従つて、農業、水産業、鑛業、工業、商業、交通業、公務、自由業及び無職に區別した。本來父兄の職業の記入に對しては、調査票以外に別に各學生に手渡した記入の注意を與へた印刷物中に、「會社員、商人等でなく、職業は具體的に、成るべく詳細に、例——〇〇銀行支店長、雜貨卸商等」と記入することを要求したに拘らず、尙ほ例へば「實業家」、「會社重役」、「會社員」、等の記入があつて、止むを得ずこれ等を一括して第一表以下「實」の欄中に入れることとした。また無職を三つに分けたのは、Iは貸地、貸家業を営むもの、IIは恩給、年金、その他の収入に依るものと見做さるゝものであつて、事實無職と記入されたものゝ大部分がこれであり、他に例へば退役

軍人をも此處に含む。IIは兩親なく記入者自身が戸主であるもの、また兄が戸主であつて、且つそれが學生にして

第一表 父兄職業別

職業別	職業別										總計	地位別					
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	無職	不明		I	II	III	無職	業主	重役
經濟學部	30	6	8	92	182	8	29	85	28	105	22	21	616	155	193	70	140
法學部 法律科	3			6	18	2	4	4	2	2	3		44	7	13	6	15
法學部 政治科	2			4	11	1	1	3	4	7	2	3	38	13	4	8	8
法學部	2			2	6			2		3	2		17	5	7	1	2
高等部	16		4	61	96	6	18	40	9	37	4	16	307	50	108	24	83
計	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254

未だ何等の職業を有せざるものをこれに屬せしめた。最後に職業分類中不明の欄を置いたのは、職業の記入あるも判讀し難きもの數名と全然無記入に放置したるものが、三十名以上あつたからである。

職業別の分類に次いで假りに「地位別」と名づけて、職業上の地位の如何に依る區別を試みて見た。その内「無職」とあるは職業別の無職欄の合計であり、「業主」とは獨立の營業主であり、「重役」に就いては通常の觀念に従つ

たので説明を要しないが、「社員」とあるは多少名稱が不適當であつて、寧ろ實際には月給取り、サラリアートの意に解して貰ひ度い。かくて公務、自由業を二分して新聞記者の如きは勿論、官、公吏、軍人の如きは「社員」中に辯護士、開業醫の如きは「業主」中に分類した。尚ほ「業主」、「重役」、「社員」の分類は職業別中農業、公務、自由業、無職及び不明を除く各方面に渡つてゐることは云ふまでもないが、記入の不充分のために僅に數名ではあるが、この分類から除外せねばならないものがあつた。

註、第一表は學部(及び科)の區別を數字上に表はしたけれども、以下特別の場合を除いては本論の目的に従つてこの區別を設けない。

三

前述の如く卒業後の目的を規準とする研究は一應断念せざるを得なかつたのであるが、これに關する項目の調査を此處に示して置くことは、本論の目的から觀て尙ほ多少の價値なしとしない。唯だこの項目の記入に際して記入上の注意を與へることの不充分であつたのと、卒業後の「方針」と云ふ言葉が測らずも調査者の期待する結果を齎さなかつた一部分の原因であつた。即ち記入の結果を見ると單に「就職」と記したものがあつた許りでなく、「實業家」、「實業界」と云ふものが多數であつて、これに職業上の區別を加へることは不可能である。しかし假りにこれ等を實業界方面に就職を希望するものと見做して、その結果を示せば第二表の如くである。

第二表 卒業後の方針

I 實業 II 自家 I+II (計)	職 業 別										地 位 別					
	農		水 産		工 商		交 貨		公 自			無 職	不 明	總 計		
	I	II	I	II	I	II	I	II	I	II						
33 88.3	6 83.3	9 75.0	87 52.7	155 48.5	9 52.9	33 63.5	71 52.0	28 65.1	76 50.6	14 42.4	16 40.0	15.8 52.6	120 52.2	138 42.5	72 61	154 60.6
1.9	1.9	1.9	20 121	33 10.5	2 11.3			2 4.7	1 0.6	2 6.1	1 2.5	62 61	5 9.2	50 15.4	5 4.6	
(34) 64.2	(5) 83.3	(9) 75.0	(107) 64.8	(138) 80.1	(11) 64.7	(33) 63.5	(71) 52.0	(30) 60.8	(79) 51.9	(10) 48.5	(17) 42.5	40.0 18.7	125 54.3	(138) 87.8	(77) 70.6	(154) 80.6
III 海外	IV 自由	V 政 治 界	VI 其 他	VII 無 方 針	VIII 未 定	IX 不 明	總 計									
1 1.9	4 7.5		1 1.7		6 11.3	8 15.1	53 102.9									
			1 0.6	2 0.6	17 36	35 69	165 313									
			1 0.3	1 0.3	10.3 11.3	21.2 22.0	12 12									
			1 0.7	1 0.7	6 11.5	10 36	106 212									
			1 0.3	1 0.3	15 30	20 39	134 255									
			1 0.3	1 0.3	4 8	6 11.5	49 92.5									
			1 0.3	1 0.3	20 39	20 39	154 284									
			1 0.3	1 0.3	6 11.5	6 11.5	38 72									
			1 0.3	1 0.3	12.0 23.0	18.2 33.6	40 75.6									
			1 0.3	1 0.3	5 9.8	5 9.8	109 209									
			1 0.3	1 0.3	8 15.1	8 15.1	254 484									

註「自家」とは自家の營業に従事せんとするものなるが、地位別中「重役」の欄にこの數字のあるのは例へば父兄が、合名會社の重役である場合に父兄の事業に従事せんとするものであり、無職「中II及IIIの場合にも同様にして亡父の事業

に従事しやうとするものである。

「海外」とは支那、滿洲を初め海外に職を求めんとするもの。

「その他」とあるは父兄の職業とは異なり、自ら獨立の營業を希望するもの、並に實業界に單に一時的の就職を希望するもの、或はまた遙かに遠き將來の希望等を記述したもの等を含む。

「無方針」とは學生自身の希望方針を有せず、唯だ父兄の意志に従はんことを記入したもの。

「不明」とは全然この項目を無記入に放置したもの。

各欄の%は職業別並に地位別の各欄の實數(實際人員數)、この場合は各總計に對する百分比である。以下各表とも同様。第二表中「實業」並に「自家」の二つを合計して見れば、大體商工業を中心とする實業界方面に將來活躍せんとする希望を有するものが、半數乃至半數以上を占めることは略々明かである。そしてその間父兄の職業上の相違の、學生の將來の希望に對する影響の差異は必ずしも大ではない。唯だ公務、自由業並に無職中II及びIIIに屬するものが農、工、商、交通業に屬するものに比して約一割の小數を示してゐることが、稍々注目に値ひするに過ぎない。即ち前者の場合には學生の家庭生活の環境が、その父兄の職業を通じて所謂實業界とは、農業を除く他のものに比較すれば、より縁遠いものであるからであらうとも推測せられる。

註 水産業並に鑛業の場合は、それに屬する人員が少數であつて暫らく問題外とすることが適當であらう。また「不明」のもの割合が他に比して小數であるのは、この場合特に不明IXのものゝ多數であるに因ること明かである。事實今回の「學生生活調査」の各項目に渡つて、全然無記入の項目を多くし、記入成績の甚だ劣悪であつたものが此處に屬してゐる。

更らに職業上の地位別から見ると、重役の子弟が他のものに比較して、商工業方面への就職の希望を既に明瞭に有してゐるものゝ割合が多いのが見逃せない。それは今日尙ほ依然として大學並に専門學校の卒業生に對する就職問題が一般の學生の悩みであるのに對して、學生中諸會社の重役の子弟が多くこの悩みから解放せられてゐるといふ事情を反映してゐるものゝやうに解せられる。

最後に自由業の方面への學生の希望を見るに、總數の上からは僅かに四パーセントに過ぎず、且つ無職のIIIの場合と農業の場合とを除いて他は大體二乃至五パーセントの間にある。これに對して無職のIIIの場合、即ち既に兩親なきものゝ場合にその割合の稍々高いことは、家庭特にその父兄の意志からの解放の結果或は學問の研究を志し、評論家を希望するもの等の割合の多くなるのは當然であるやうに思はれるのであるけれども、これは未だ僅かに十三名中の割合であつて、今直ちにかくの如く斷定することは或は不穩當の譏を免れないであらう。また農業の場合には單に自由業への學生の希望許りではなく、また商工業方面への就職の希望とを合算して考慮すれば、約七割のものがこれに屬して居り、自家の業務を繼承して農村に歸還するものゝ割合の小なるに比較すれば、それは家庭の拘束から離れた農村出身のインテリゲンチヤの必然の方向と一致する。

學生の卒業後の方針に關しては、父兄の職業並に職業上の地位の相違に従つて、以上の如き僅かの差異を認め得るものゝやうに思はれるが、その差違たるや未だ左程大ではない。従つて或は寧ろ總體的に觀て卒業後海外に雄飛し、或は自由業の方面に入らんとする希望者の甚だ小數であること、これに對して學生の過半數が、卒業後實業界

に就職の希望を有するものであるといふ事實を確認することの方が適當であらう。そしてこのことは從來本塾大學並に高等部の卒業生に就いて一般の知験してゐる所に一致し、且つ筆者達は卒業後の方針に關する「不定」並に「不明」の數字が全般に今少しく小なるものとすれば、この傾向は一般に更らに大であつたらうとさへ考へる。それは兎も角としてこの全般的な傾向は學生の思想生活の一つの重要なモメントとして吾々の見逃し得ない所であらう。

#### 四

「學生生活調査票」に記載の順序に従つて、先づ學業の方面から調査の結果を吟味することゝしやう。この項目では三つの點に就いての結果を此處に利用することゝした。即ち(a)學生の平素興味ありとなす講義科目、(b)學内に於いて彼等が入會關係せる學生の諸會、及び(c)學外に於いて彼等が通學する學校、或は講習會等がこれである。

現在、學生が如何なる科目に興味を有するかは、彼等の思想的方面を知るための一つの手懸りであることは云ふまでもない。以下第三乃至第五表に依つて略々彼等の興味の傾向を推測することが出來やう。唯だ學生の興味ありとする科目は各表の示すものよりは具體的に記述され、従つて一層多數であつたが、便宜上各表の示すやうに、各々一般的な名稱を以つて總括した。尙ほ科目は各學部に於いて特色あるものであるため、學部(或は科)別に表示することゝする。

經濟學部の學生に就いて觀れば、經濟學並に金融論に關するものを初めとして、社會學並に經濟史關係の講義に興味を有するものが約二割前後を占め、各々他の諸科目に比して優位にある。そしてこのことは總體的にさうであ

る許りではなく、また職業別並に職業上の地位別に就いても大體同様の傾向を示してゐる。唯だ工業關係者の子弟の金融論に對する興味が比較的少なく、重役の子弟の經營學關係の諸講義に對する關心の度の稍々高いことが、僅かにその例外をなしてゐるに過ぎない。右の傾向の内、特に金融論並に經營學關係の諸講義に一般の學生の興味が、稍々高いことは、今日の社會經濟狀態の反映かと推測せられる。即ち一つは最近に於ける世界的な經濟問題としての通貨問題の重要性と、他は吾國內に於ける諸産業の躍進とその調和的發展の諸問題の喧傳とに何等の關係をも有しないとは考へられない。但しそれは單に學生の學問研究的な一面の方向であつて、筆者達は更らにその裏面にある一つの動機を見ることが出來るのではないかと思ふ。それは卒業後の就職問題に對する學生の意識的な準備である。嘗つて十數年前の、筆者達の學生時代の經驗を回顧すれば、勿論此處では吾國の經濟學界の推移をも同時に考慮しなければならないのはあるが、確かに理論經濟學を中心とする抽象的、思想的の研究への學生の關心は移動して了つてゐる。そして時には學究的な動機以外のものゝ存在が、觀取せられる。且つまたこのことは平素筆者達が今日の學生に就いて知見する所の事實がこれを裏書きしてゐる。しかし純學究的な態度から觀て、經濟史並に社會學關係の講義に對する學生の關心の度が相當に大であり、またこれに理論經濟學、經濟政策、學說並に思想的方面への彼等の關心の度を同時に考慮すれば、依然として現在の學生の純學究的な關心が甚だ大であると云はなければならぬ。筆者達は此處に思想的な内容に關して云ふよりは寧ろ學生の好學的態度の傾向に就いて論じた所以は、最近の學生——それは單に恐らくは吾が慶應義塾大學の學生のみならず——が、平素就職のために

第三表 興味ある科目 (經濟學部)

	職業別										總計	地位別							
	農			工業			商業			實業		公務	無職	不職	無職業主	重役	社員		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1		2	3	1				2	3
經濟原論	1	1	8	21	11.5	6	6	6	7.1	8	8	1	1	2	54	9	16	9	17
經濟政策	1	12.5	8.7	15	12.5	20.7	7.1	11	12	7.6	4.5	1	1	2	88	5.8	8.3	12.9	12.1
經濟思想史	3	16.7	13.0	7.1	25.0	6.9	12.9	7.1	11.4	4.5	9.5	2	2	38	16	21	6	14	10.0
經濟史	10.0	1	6	15	8.1	3.4	4.7	3.6	6.7	4.5	1	1	39	9	11	4	12	8.6	12
財政學	23.3	2	11	33	18.1	25.0	17.2	18.8	25.0	18.1	22.7	3	110	31	30	14	25	17.9	17.9
統計學			4	4	2.2	2.4	2.4	2	1.9	2	2	1	12	2	3	3	2	4	4
經濟地理學			3	3	2.2	10.3	5.9				4.8	1	16	2.6		4	4	10	10
金融論	7	2	12	44	3	5	20	5	26	5	26	5	2	136	38	40	16	32	32
經濟學關係論	23.3	35.3	37.5	13.0	24.2	37.5	17.2	23.5	17.9	26.7	22.7	9.5	22.1	24.5	20.7	22.3	22.9	22.9	22.9
社會學關係論	35.3	35.3	50.0	22.8	25.8	12.5	24.1	16.5	28.6	20.0	9.1	1	135	31	44	24	26	26	26
社會學	3	2	20	35	1	5*	16	5	17	5	6	4	113	27	42	13	24	24	24
法律	10.0	2	21.7	19.2	12.5	17.2	18.8	17.9	16.2	22.7	19.0	1	8.3	17.4	21.8	18.6	17.1	17.1	17.1
法	6.7	2	1.1	2.7	3.4	3.5	7.1	1.9	4.5	1	2	1	17	5	5	4	2	4	4
英文學 (及文學)	1	3.3	3	2	1.1	2.4	2	1.0	1.0	1	1	1	9	1	10	2	2	3	3

外國語	職業別										總計	地位別					
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1		2	3	1	2	3	
その他	1	6	10	5	4	4	1	11	2	2	44	14	10	6	11	7.9	
無記入	3.3	2.2	5	2.7			1.0	4.5	1	1	10	2	5	1	1	0.7	
計	38	15	186	15	46	118	36	152	27	27	833	215	271	118	266	266	
(註) 複重	8	7	44	85	7	17	33	8	47	5	267	60	78	48	6	6	
實數	30	6	8	92	152	8	2	85	28	105	22	21	616	155	191	70	140

\* 政治學1を此處に含む。

註 重複とは一人にて二以上の科目を記入したる場合に、例へば2科目記入の場合には重複1とし、3科目記入の場合は重複2と計算する。以下各表につき重複とある場合はこれと同様の意に解せられたし。

み動くものが相當あり、世間からは大學がまた學問の府でないやうに見られる傾向が無きにしてもあらずであるのに対して、些か世の注意を喚起したいと思つたからである。

また別に、工業方面の關係者の子弟の場合を初めとして、如何なる科目にも何等興味を有せずとするものが一割乃至二割以上に渡つて存することは見逃せない事實である。それが如何なる理由に従つてゐるかは、容易に推測し難い事實ではあるが、それは何れにしても吾々の無視し得ない所であらう。

法學部並に文學部は共に餘りに調査人員少數であつて事實の理解は不可能に近いが、法學部政治科の學生に於い





第四表の2 興味ある科目 (法學部政治科)

	業 別						總計	地 位 別						
	業			別				無職	兼職	業主	重役社員			
	農	水	工	商	交	實						I	II	III
政治學	1	50.0	1	25.0	3	100.0	2	50.0	4	67.7	14	6	2	1
政治及外交史			1	27.3	4	36.4	5	13.2	1	13.2	5	1	2	2
支那研究									1	14.3	2.6	1		
I 計	(1)	50.0	(2)	50.0	(7)	100.0	(2)	50.0	(5)	66.7	(20)	(7)	(3)	(4)
憲法							1	33.3	2	28.6	7.9	3	2	1
民法				2	1	100.0	2	50.0	1	50.0	7.9	6	3	2
商法				1							15.8	23.1	5.0	12.5
國際法				9.1	1						2.6	1	1	
II 計			(4)	36.4	(1)	100.0	(2)	66.7	(2)	28.6	(12)	(5)	(4)	(2)
名著研究									1	14.3	2.6	1		
經濟學原論	1	50.0		2	18.2			1	25.0	1	2.6	5	2	2
經濟政策			1	25.0							13.2	15.4		25.0
III 計			1	18.2							7.9	2		50.0
經濟思想史	1	50.0		2	18.2						2	2		
經濟史			1	25.0	2	18.2					10.5	1	1	2
金融論			1	18.2	1	18.2					4	1	2	1
III 計	(2)	100.0	(2)	50.0	(6)	100.0	(1)	33.3	(1)	42.9	(15)	(4)	(3)	(4)
社會學				1	9.1					42.9	10.5	3	1	
統計學			1	25.0						1	5.3	1	1	
哲學				2	18.2					50.0	5.3	7.7		12.5
生物學				1	9.1						2.6	1	1	2.5
計	3		5	21	2	0	3	3	5	14	2	2	2	6
政治科人員	2		4	11	1	1	3	4	7	2	38	13	4	8

う。高等部學生に於けるこの傾向は、高等部それ自身が、Free education を目的として設けられたるものであると聞いてゐるに拘らず、事實は寧ろ高等商業學校化されてゐるのに因るのは勿論である。

次いで學校内に於ける大體學生を本體とする諸會に於ける學生の分布を見やう。それは第六及び第七表の示す如くである。唯だ遺憾乍らこれ等の表に於いては、今回の「學生生活調査」が約三千枚の調査票の配布に對してその三分の一の記入者しか得られなかつたことの缺點が稍々明白に現はれてゐる。従つてこれ等の表に就いて云々する



第五表 興味ある科目 (高等部)

	職業別										無職業者	地位別					
	農			水産			工商			交實			計	主重	役員社員		
	無職	自給	別	無職	自給	別	無職	自給	別	無職		自給				別	
經濟原論	3	17	24	4	3	9	3	12	5	83	15	26	7	27			
	18.8	75.0	27.9	25.0	66.7	16.7	22.5	33.3	32.4	31.3	27.0	30.0	24.1	23.2	30.3		
經濟政策	3		12	12	1	2	2	2	2	34	4	10	2	15			
	18.8		19.7	12.5	16.7	5.0	22.2	5.4	11.1	11.1	8.0	9.3	8.3	16.9			
經濟及社會思想史			3	5		1	4	1	1	15	1	6	6	2	5		
			4.9	5.2		5.6	10.0	2.7	6.3	4.9	2.0	5.6	8.3	5.6			
經濟史			1	2					2	5	5	2	2	1			
			1.6	2.1					12.5	1.6	1.9	4.2	1.9	4.2			
財政學			5	5				1	1	7	7	2	2	2	1		
			5.2	5.2				11.1	2.7	2.3	4.0	1.9	4.2	2.2			
金融論	2		5	6	1	1	1	2.5	2	1	19	2	6	6	1		
	12.5		8.2	6.3	16.7	5.6	2.5		60.0	6.3	6.2	4.0	5.6	4.2	7.9		
經營學關係			2	4		2.5	1.5		1	1	9	1	1	5	2		
			3.3	4.2		2.5	1.5		25.0	6.3	2.9	2.0	2.0	4.6	2.2		
(經濟學諸科目) 計	(8) 50.0	(3) 75.0	(40) 65.6	(68) 60.4	(6) 100.0	(5) 27.8	(17) 42.5	(6) 66.7	(16) 43.2	(3) 75.0	(10) 62.5	(17) 56.0	(25) 50.0	(14) 52.8	(58) 65.2		
統計學	1									1							
	6.3									0.3							
社會學	1																
	6.3																
地理	1																
	6.3																
歴史	1																
	6.3																

政治史			1								1							
			1.6								2.7							
政治學			2								2							
			3.3								0.7							
法律	1		4								2							
	6.3		6.6								12.5							
哲學、倫理、心理	2		5								1							
	12.5		25.0								6.3							
國語及漢文	1		2								9							
	6.3		8.2								17							
英語	3		3								2							
	18.8		11								12.5							
獨佛語			27								29							
			38.1								38.3							
自由研究			1								1							
			1.0								1.6							
その他(書學、文、興)			3								4							
			3.1								1.3							
計	4		12								3							
	25.0		19.7								18.8							
電			81								398							
			128								56							
寶			20								91							
			32								6							
數			4								50							
			61								108							

澤先生の實際の精神に生かやうとする學生の團體である。

第七表の一は法務部の學生に關するものであるが、その内I及びIIに一括したものは法律科の學生が専らこれ

第六表 學内諸會 (經濟學部並に高等部)

	職 業 別											總計	地 位 別								
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	無 職				不	無	業	主	重	役	社	員	
									I	II	III										
I 文化科學研究會					1								1		1						
統制經濟研究會								1					1						1		
經濟史學會			1		1			1					3		2				1		
都市及社會事業研、				1	6	1		4		2		2	16	2	5	2	5				
鐵道研究會					1			1					2						2		
日本經濟事情研、										1			1	1							
東亞事情研究會	1			1	1			1	1	1			6	2	2				1		
南洋事情研究會	1			1	3			1	1				7	1	4				1		
金融研究會			1	3		1		2	1	1			9	2	2	1	4				
I 計	(2)	(2)	(6)	(13)	(2)		(11)	(9)	(5)		(2)	(46)	(8)	(16)	(3)	(15)					
%	4.3	16.7	3.9	4.7	14.3		8.8	8.1	3.5		5.4	5.0	3.9	5.3	3.2	6.6					
II 産業研究會	3			5	16		6	6	2	2	1	2	43	5	19	2	12				
廣告研究會	1			4	6					2			13	2	8				2		
計理學研究會	1				3		2	3		2	1		12	3		1	7				
速記研究會				3			1			1			5	1	1	1	2				
II 計	(5)		(12)	(25)		(9)	(9)	(4)	(5)	(2)	(2)	(73)	(11)	(28)	(4)	(23)					
%	10.9		7.8	9.0		19.1	7.2	10.8	3.5	7.7	5.4	8.0	5.4	9.3	4.3	10.0					
III 福澤先生研究會							1	1	1				3	2	1						
佛教青年會					1					2			3	2					1		
日本眞理運動				1									1			1					
道 會	1										1		2	1							
キリスト教青年會				1						1			2	1					1		
III 計	(1)		(2)	(1)			(1)	(1)	(4)	(1)		(11)	(6)	(1)	(1)	(2)					
%	2.2		1.3	0.4			0.8	2.7	2.8	3.8		1.2	2.9	0.3	1.1	0.9					
IV 國際協會					1								1						1		
三田新聞學會					2			1					3		2	1					
辯論部	1									1			2	1							
英語會					4	1	4	1	2	3	1	1	17	6	3	2	5				
童話研究會				1									1						1		
映畫研究會				1						1			2	1					1		
惜字會	1			2	4					2			9	2	4	1	1				
書道會					3					1			4	1	2				1		
航空研究會								1		1			2	1					1		
自動車研究會									2				2	2							
IV 計	(2)		(4)	(14)	(1)	(4)	(3)	(4)	(9)	(1)	(1)	(43)	(14)	(11)	(5)	(10)					
%	4.3		2.6	5.0	7.1	8.1	2.4	10.8	6.3	3.8	2.7	4.9	6.8	3.7	5.3	4.4					
總計	10	2	24	53	3	13	24	12	23	4	5	173	39	56	13	50					
重複	1		2	4		1		5	2			15	7	2	2	3					
各會入會者數	9	2	22	49	3	12	24	7	21	4	5	158	32	54	11	47					
%	19.6	16.7	14.4	17.6	21.4	25.5	19.2	18.9	14.8	15.4	13.5	17.1	15.6	17.9	11.7	20.5					
無記入	37	6	10	131	229	11	35	101	30	121	22	32	765	173	247	83	182				
實數	46	6	12	153	278	14	47	125	37	142	26	37	923	205	301	94	229				

第七表の1 學内諸會(法學部)

	職 業 別										總 計	地 位 別				
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	無 職			無職	業主	雇役	社員	
									I	II						III
法律鑑定部	1				5		1							7	2	4
獨法研究会	1						1							2		1
佛法研究会					1	2								3	1	1
英美法研究会				1	4			2						7	4	2
I 計	(2) 40.0			(2) 20.0	(1) 37.9	(2) 40.0	(2) 28.6			(19) 33.2		(7) 41.2	(2) 14.3	(3) 34.8		
II O W 會									1					1	1	
II 土 洋 會					1									1		1
II 計					(1) 3.4				(1) 11.1		(2) 2.4	(1) 5.0	(1) 7.1			
東亞事情研究会					1					1	2	4	3	4	3	1
III 南洋事情研究会								1			1	1	1	1	1	1
金融研究会				1	1						2	2	2	2		1
III 計				(1) 10.0	(2) 6.9		(1) 14.3	(1) 16.7	(2) 22.2		(7) 8.5	(3) 15.0	(2) 14.3	(2) 8.7		

產業研究会				1						1	2	1	1			
IV 廣告研究会			1								1		1			
IV 計	(1) 20.0		(2) 20.0	(1) 3.4			(1) 16.7		(1) 20.0	(6) 3.7	(2) 10.0	(1) 5.9	(2) 14.3			
V 福澤先生研究会					2					2.4	2	2	2		2	11.8
三田新聞學會	1									1	1					
辯論部			1							1	2					1
VI 英語會			1							1	1					1
映畫研究会				1					1	2	1	1	1			1
書道會				1						1	1					1
VI 計	(1) 20.0		(1) 10.0	(3) 10.3					(1) 20.0	(1) 33.3	(7) 8.5	(1) 10.0	(4) 17.4			
總 計	4		6	20	0	2	3	2	3	2	1	43	7	10	7	14
實 數	5		10	29	3	5	7	6	9	5	3	82	20	17	14	23

に屬して居り、これに對してI及びIVに含まれたものには大體政治科の學生が歸屬してゐる。そしてこのことは講義科目の場合に見ることが出来たと同じやうに、政治科の學生の經濟學並に經濟事情の方面に於ける彼等の關心の

第七表の2 學内諸會(文學部)

	職業別						總計	地位別										
	農	水	礦	工	商	交		實	公	無職			業主	重役	社員			
										I	II	III						
三田哲學會	1			1									1	1				
三田史學會				1								1		2	1			1
英文學會				1					1					2	1			1
國文學研究會									1					2		2		
源氏物語全講會										1				1		1		
明治文學座談會											1			1	1			
現實短歌會												1		1	1			
日本民族協會													1	1				
郷土研究會													1	1				
臺語研究會													2	2				
總計	1			2	9			2		1	3		18	4	7	1	5	
實數	50.0			100.0	150.0			100.0		33.3	150.0		105.9	80.0	100.0	100.0	250.0	
實數	2			2	6			2		3	2		17	5	7	1	2	

法政文總計	電	各會	入會者數	無記入者數	計														
					5	8	29	2	5	2	4	4	5	1	61	11	17	8	19
實	4	4	57.1	3	7	22	2	4	2	4	4	3	1	49	9	14	8	13	
				5	13	33.9	40.0	44.4	33.3	33.3	42.9	33.3	49.5	36.0	53.3	53.3	52.0		
				7	12	35	3	5	9	6	12	7	3	99	25	24	15	25	

傾向を示してゐるとも考へられる。文學部學生に就いては主としてその調査人員の少數の故に何事も傳へ得ないのは甚だ遺憾である。

以上の事實は、しかしその反面に於いて、その何れの團體にしても全體から見ると、これに屬する學生が甚だ少數であるといふ事實と併せて考へなければならぬことは勿論である。法學部並に文學部の調査學生の約半數は何れかの團體に屬すると云ふ數字が現はれてゐるが、その實際の人員は少數であつて、全體から見れば全調査人員中僅かに二割餘りのものが各會に分布してゐるに過ぎない。このことは第六表と對照して自ら明かである。そしてこのことから亦吾々はこれ等の事實から吾々の問題に對する興味ある事實を惹くことは困難である。

最後に學外に於いて、學生が如何なる方面に彼等の知識並に技能を進めやうと努力してゐるかを知らるために、第八並に第九表が役立つ。

全體としては調査學生の僅かに一割のものが學外に於いて何もかを修得しやうと努力してゐるに過ぎない。そ

第八表 學外の學校講習會等 (經濟學部並に高等部)

	職業別						總計	地位別								
	農		業		無職			無職	業主	雇役	社員					
	水	礦	工	商	交	實						I	II	III		
外國語學修算			3	9	2	5	2	6	2	7	2	23	10	13	4	2
珠算	2		2.0	3.2	4.3	4.0	5.4	4.2	6	7.7	2	3.1	4.9	4.3	4.3	0.9
書道	4.3		10	10	3.6	6	2.2	9	3	5.4	2	4.4	14	16	5	5
村田簿記學校			6.5	3.6	7	4.8	5.4	6.3	11.5	2	4.8	4.8	6.8	5.3	5.3	2.2
YMCA. 村田簿記學校			3	2.5	1	0.8	2	7.7	1.6	1.6	1.6	1.6	4	4	3	4
YMCA. 村田簿記學校			2.0	7	2.5	1	5.4	1	1.6	1.6	1.6	2.0	2.0	1.3	3.2	1.7
カイトライスター																1
貿易債務講習會				1								1	1	1		
計			(1) 0.7	(1) 0.4		(1) 0.8	(1) 0.7		(4) 0.4	(1) 0.5	(2) 0.7	(1) 0.4				
文學部 聽講				1								1	1	1		
國學院神道講習會						1						1	1	1		
明大新聞 高等研究會					1							1	1			1
東亞經濟調查局												1	1			
京大經濟史研究會												1	1			

現代藝術研究所	浪曲學校	聖書研究會	Y M C A	計		計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
				(1) 2.2	(2) 1.3	(1) 0.7	(2) 2.1										
				19	29	3	14	7	17	7	2	101	31	38	14	13	
電	複					2		1				3	1	2			
通學者	數			19	29	3	12	7	16	7	2	98	30	36	14	13	
通學者	%			12.4	10.4	6.4	9.6	18.9	11.3	26.9	5.4	10.6	14.6	12.0	14.9	5.7	
無記入者	數			43	6	12	134	249	14	44	113	30	126	19	35	825	175
實	數			46	6	12	153	278	14	47	125	37	142	26	37	923	205
				6	12	153	278	14	47	125	37	142	26	37	923	205	301
				46	6	12	153	278	14	47	125	37	142	26	37	923	205

して經濟學部並に高等部の學生中右の一割のもの、約半數は珠算の學修に努めてゐる。これは明かに彼等が在學中から卒業後の就職の準備に心がけてゐる證據である。他は別段此處に取り擧げて云ふ必要はなからう。

五

「學生生活調査票」の愛讀書に關する項は次項に述べる自己の敬愛する人物に關する場合と同様に、豫め諸方面を學生生活の思想的方面の一調査



第九表 學外の學校、講習會等（法學部並に文學部）

	職業別						總計	地位別				
	農	水	工	商	交	實		無職	業主	雇役	社員	
	I	II	III	無	無	無	計	無職	業主	雇役	社員	
外國語學部	1			1	1	2	6	1	1		3	
算術	14.3			2.9	1	20.0	6.1	4.0	4.2		12.0	
書道				33.3	1		1.0	4.2	1			
明大文學部				1	1		2	1	4.2	1	1	
新聞學部			1				1	1	4.0			
計	1	1	2	2	1	2	11	2	3	1	4	
實				1			1	1				
通學者數	1		1	2	1	2	10	2	2	1	4	
無記入者數	14.3		8.3	5.7	33.3	20.0	10.1	8.0	8.3	6.7	16.0	
實	6		11	33	2	4	89	23	22	14	21	
實	7		12	35	3	5	99	25	24	15	25	

規定して各々それへの記入を求めた。即ち愛讀書に就いては(a)文學、(b)宗教、(c)政治、經濟、社會、及び(d)自然科學の四方面に限定した。このために記入者中には自己の愛讀書をその何れに記入すべきかに逡巡したも

のが多少あつたやうである。特に哲學、歴史、傳記に關する著作の如きはこれであつて、調査者に於いてもその甚だ不適當だと思はれる以外は、記入者の意志通り結果を整理することとした。第十表乃至第十三表が右の四方面に關する學生の愛讀書の整理の結果である。吾々はこれ等の諸表の示す事實から些か學生の思想的或は一般に彼等の主觀的生活の一端に觸れることが出来るであらう。

學生の愛讀書中、經濟、社會及び法律の所謂社會科學的方面に關するものは、第十表の示す如く、全體としては調査人員の三十五パーセント、即ち大體その三分の一のものに依つて挙げられたに過ぎない。この點から見ると社會科學的文獻に對して大部分の學生の態度は寧ろ悲觀すべきものであると云はねばならぬ。これを父兄の職業並に職業上の地位別に就いて見ると、農業、商業及び無職のIIに屬するもの、内愛讀書を指摘し得なかつたものが約六割で最低を示し、公務、自由業並に無職のIIIに屬するものはその割合七割に達してゐる。——水産業並に鑛業に屬するもの、數字は餘りに小であるため、また實業並に不明に屬するものは職業上の分類が不可能であるため考慮外に置く——そして職業上の地位別から云へば、獨立營業者の子弟の場合を最良として、サラリアート並に重役の子弟の場合が最悪の状態にある。しかしこれ等の數字上の相違は未だ必ずしも大でなく、従つて確定的な判斷を下し得ないことは勿論である。

次に愛讀書の内容に就いて見れば、マルクシズムの立場を採る文獻に對する愛讀の傾向が最も著しい。そしてこのことは交通業並に無職IIIの場合を除いて、他の職業、及び職業上地位別の如何を問はず、何れの場合にもこの

傾向が大體現はれてゐる。その内農業、商業及び無職Iに比較すると、無職IIの場合にこの傾向が稍々強く、工業の場合がこれに次いでゐる。

註 第十表のマルクシズムの文献中、「帝國主義その他」とあるは文献的に云へば、レーニンの帝國主義論、ルクセンブルグの資本蓄積論及ヒルファディングの金融資本論を初めとしてその他二三のものを含む。

マルクシズムの文献に次いで、社會思想、特に社會思想史に關するものが比較的多く愛讀せられる。そして此の場合にも亦無職IIと工業の場合が多少とも他に優れた割合を示してゐる。(無職Iに屬するものゝ傾向はこの場合相對的にはマルクシズムの場合と反對である。)職業上の地位別に於いては、重役の子弟がマルクシズムの文献並に社會思想に關する文献に就いて、共に他のものより多少大なる傾向を示してゐる。更らにこれ等の方面の文献に次いで、經濟原論、經濟政策及び金融論に關するものが指摘せられ得るのであるが、別に吾々は此處では次ぎの事實を指摘するに留めやう。即ち金融論並に經營學の文献に於いては商業の場合が、經濟原論並に經濟政策に關する文献に就いては工業の場合が稍々他に勝つて居り、職業上の地位から見れば、重役の子弟の場合には經濟原論に於いて、サラリアートの子弟に於いては經濟學史及び經營學の文献に關心を有するものが稍々多い。

註 第十表の附表は義塾諸教授の文献に對する學生の愛讀の度を示すために作成して見た。これで見るとそれは本表の方の數字に比較すると稍々高いけれども、全體として學生の愛讀書とするものは、廣く世間の公刊書に渡つてゐると云はなければならぬ。

尙ほ社會科學文献中、今回の調査に於いて最も多く學生に愛讀せられてゐる著作の著者に就いて云へば、小泉信三博

士の諸著作に對する二十五人の愛讀者を筆頭に、マルクスの十五人、向井鹿松教授並に故福田徳三博士の十一人、高橋誠一郎教授の十人並に加田哲二教授の九人(以下省略)の順位である。

社會科學の文献に次いで、宗教、文學、及び自然科學方面に於ける學生の愛讀書は第十一、二及び三表の示す如くである。この内學生の約半数は文學書中に愛讀書を挙げ得たものであつて、それは社會科學の文献に對するよりも一層多くの愛好者を有してゐる。これに對して宗教並に自然科學中に平素愛讀する著作を示したるものは遙かに少數である。

宗教書中佛教關係のものが最も多く讀まれるのは寧ろ當然であると思はれるのであるが、此處に學生の愛讀書として挙げられたものを見ると、友松圓諦氏の諸著作に對する學生の關心が甚だ大であつて、他にこれに次ぐものな多くは單に二三人の愛讀者を見出してゐるに過ぎない。尙ほ友松氏の著作以外のものゝ内には、最近特にラヂオに依る聖典講義の流行に従つてこの方面のものが多し。これ等の事實を考慮すれば、最近吾國に於ける所謂宗教(佛教)復興の一般的な氣運が、稍々強く學生の關心を惹きつゝあると云はなければならぬ。そしてこの影響は大體農業及び無職のIIに屬するものに最も強く、商業並に公務自由業の場合に比較的弱く、更らにサラリアートの子弟に最も弱い影響を與へてゐるものと觀察せられ得る。

宗教書に關する學生の右の如き稍々著明な態度と、全體から見れば今回の調査學生中には事實少數ではあるが、これも亦一つの稍々著明な傾向としての、依然マルクシズムの立場の文献に對する學生の愛着とが、一つの興味あ

第十表 愛讀書(經濟、社會及び法律に関するもの)

	種類	職業別											總計	地位別				
		農	水	鑛	工	商	交	實	公	無職				不明	無職	業主	重役	社員
										I	II	III						
經濟原論	14	3 5.7	1 16.7	2 16.7	8 4.8	13 4.2		2 3.9	5 3.7	2 4.7	3 3.9			42 4.1	8 3.5	13 4.0	5 4.6	11 4.3
經濟政策	22	1 1.9	1 "	2 "	7 4.2	6 1.9		2 1.5		4 2.6	1 3.0	3 7.5		27 2.6	5 2.2	8 2.5	5 "	4 1.6
經濟學史	22	3 5.7			7 "	17 5.4	3 17.6	1 1.9	3 2.2	1 2.3	5 3.2	1 "		41 4.0	7 3.0	15 4.6	4 3.7	13 5.1
社會思想史	4	2			7	15		1		3	9		2	43	12	10	7	10
社會思想	7		1		3	2		1		1				8	1	5	1	1
(計)	(11)	(2) 3.8	(1) 16.7		(10) 6.1	(17) 5.4		(1) 1.9	(5) 3.7	(3) 7.0	(10) 6.5		(2) 5.0	(51) 5.0	(13) 5.7	(15) 4.6	(8) 7.3	(11) 4.3
經濟史	12	1 1.9			2 1.2	8 2.6			4 3.0	2 1.3	1 3.0			18 1.8	3 1.3	10 3.1		4 1.6
財政學	4		1 16.7		1 0.6	3 1.0				1 0.6				6 0.6	1 0.4	4 1.2	1 0.9	
金融論	18	5 9.4		1 8.3	3 1.8	16 5.1		2 3.9	1 0.7	7 4.5	2 6.1			37 3.6	9 3.9	12 3.7	4 3.7	7 2.8
經營學	6	1 1.9		1 "	6 3.6	14 4.5	1 5.9	1 1.9	5 3.7	3 1.9				32 3.1	3 1.3	12 "	2 1.8	12 4.7
經濟事情及研究	9	2 3.8			4 2.4	2 0.6		1 1.9	2 1.5	1 2.3	1 0.6			13 1.3	2 0.9	6 1.8		3 1.2
資本論	1		1		1	2	1	1	1	3				10	3	3	2	2
資本論解説書	10				1	5	6	1	1	3		1		18	3	6	3	5
帝國主義論その他	7				1	2	2		1	1	6	1		14	8	3	2	1
唯物辨證法	4					2		1	2					5		3		2
歴史的研究	9	2			6	1			4	2	3		2	20	5	6	1	4
その他	20	1			5	11		1	3		6		2	29	6	8	4	8
(マルクイズム文献)計	(51)	(3) 5.7	(1) 16.7	(2) 16.7	(19) 11.5	(24) 7.7	(1) 5.9	(4) 7.7	(12) 9.0	(3) 7.0	(21) 13.6	(1) 3.0	(5) 12.5	(96) 9.4	(25) 10.9	(29) 8.9	(12) 11.0	(22) 8.7
社會學	8				3 1.8	2 0.6		1 1.9	4 3.0	4 2.6				14 1.4	4 1.7	3 0.9		7 2.8
經濟學全集類	6	1			3	9	2	1	3	3	3	2		27	8	10	2	6
その他の經濟書	7	2				3			1	4				10	4	3		1
(計)	(13)	(3) 5.7			(3) 1.8	(12) 3.8	(2) 11.8	(1) 1.9	(4) 3.0	(3) 7.0	(7) 4.5	(2) 6.1		(37) 3.6	(12) 5.2	(13) 4.0	(2) 1.8	(7) 2.8
政治學	9				1	5		1	1		1		1	10	1	2	2	4
政治及外交史	4					3					3			7	3	1	1	2
(計)	(13)				(2) 1.2	(8) 2.6		(1) 1.9	(1) 0.7		(4) 2.6		(1) 2.5	(17) 1.7	(4) 1.7	(3) 0.9	(3) 2.8	(6) 2.4
法律學	6				2 0.6	1 5.9		1 0.7	1 2.3		1 3.0		1 0.6	6 0.6	2 0.9	2 0.6		2 0.8
哲學及心理學	18				1 0.6	4 1.3		7 5.2	5 3.2	2 6.1	1 2.5		1 2.0	20 2.0	7 3.0	3 0.9	2 1.8	7 2.8
歴史	4	1 1.9			1 0.3			1 0.7		1 0.6				4 0.4	1 0.4		1 0.9	1 0.4
雜	18			1 8.3	4 2.4	10 3.2	1 5.9	2 1.5		4 2.6				22 2.2	4 1.7	5 1.5	5 4.6	8 3.1
無記入者		32 60.4	1 16.7	5 41.7	108 65.5	192 61.3	11 64.7	41 78.8	96 71.6	29 67.4	96 62.3	24 72.7	33 82.5	668 65.4	149 64.8	204 62.8	74 67.8	169 66.5
總計	249	57	6	14	188	351	20	56	155	43	181	35	45	1151	259	357	128	294
重複		4		2	23	38	3	4	21		27	2	5	129	29	32	19	40
實數		53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254

第十表 附表

現義塾教授の諸著作	14	3 .7	1 16.7		11 6.7	24 7.7		2 3.9	5 3.7	2 4.7	8 5.2	2 6.1	2 5.0	60 5.9	12 5.2	21 6.5	7 6.4	14 5.5
故義塾教授の諸著作	4				1 0.6	4 1.3		1 1.9		1 2.3	2 1.3			9 0.9	3 1.3	2 0.6	2 0.9	2 0.8
計	18	3 5.7	1 16.7		12 7.3	28 8.9		3 5.7	5 3.7	3 7.0	10 6.5	2 6.1	2 5.0	69 6.8	15 6.5	23 7.1	8 7.3	16 6.3

(註) 種類欄の數字は愛讀書として挙げられた著作の數を示す。

第十一表 愛讀書(宗教書)

種類	職業別										總計	地位別					
	農	水	工	商	交	實	公	無職	職	不明		無職	業主	電役社員			
友松園誌	9	7	1	9	18	1	4	5	6	15	3	2	70	23	22	6	10
佛敎諸典解詁書	17	13.2	16.7	5.5	5.8	5.9	7.7	3.7	11.6	9.7	9.1	5.0	6.8	10.0	6.8	5.5	3.9
	17	1.9	1.9	1	5	2	3.9	2.2	2.3	2.6	6.1	2	1.9	3.0	0.9	0.8	2
佛敎關係書	27	3	3.7	4	9	9	4	4	8	5.2	8	1	29	8	13	1	3
	57	5.7	5.7	2.4	2.9	2.4	2.9	3.0	3.0	5.2	5.2	2.5	2.8	3.5	4.0	0.9	1.2
佛敎關係書計	(53)	(11)	(1)	(14)	(32)	(1)	(6)	(12)	(6)	(27)	(5)	(3)	(155)	(38)	(38)	(13)	(15)
	7	1	1.9	3	4	5.9	11.5	9.0	14.0	17.5	15.2	7.5	11.5	16.5	11.7	11.9	5.9
神道關係書	3	1.9	1.9	1.8	1.3	2	0.7	1	3.0	3.0	1	1.0	1.0	0.4	1.5	1.8	0.4
四書五經、易書、孟子	3	1	1	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6	0.6
キリスト敎に關するもの	17	1	1	5	10	4	1	4	7	4.5	7	3	33	7	10	4	11
宗教研究書	20	1.9	16.7	3.1	3.2	23.5	1.9	3.0	4.5	2	1	3.2	3.2	3.0	3.1	3.1	4.3
	20	2	2	4	10	1	1	5	2	2	3.0	1	2.4	2.5	3	7	2
その他	3	3.5	3.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4
無記入者	39	4	12	143	263	14	44	114	37	123	27	37	87	157	27.4	38	221
總計	103	54	6	12	170	323	19	52	136	43	161	34	40	1050	238	337	111
重複	1	1	1	5	10	2	2	2	2	7	1	1	28	8	12	2	5

る對立をなしてゐる。しかもこのことが、その父兄が既に一定の職業から退いたと思はるゝものゝ子弟の間に最も著しい點が、吾々に何も何かを暗示するのではなからうかと想像せられる。

次に學生の愛讀書中文學並に自然科学に關するものは、直接學生の思想問題と關聯して重要であると云ふよりは、寧ろ彼等の趣味生活により重要な關係を有してゐる。勿論これ等の方面と雖も尙ほ間接に彼等の思想生活を知るに多少の便宜は得られはする。しかし此處では主として右の理由に依つて、此處に多言を費すよりは寧ろ讀者の多少の參考のために、第十二及び三表を提示して置かう。

註 今回の「學生生活調査」中、その運動趣味、娛樂の方面はこれを一括してまとめ得るものであり、何れまた最近機會を得て公表したい意向である。従つてその際には此處に擧げた文學及び自然科学に關する學生の愛讀書も再び問題とせられるであらう。また次項に述べる學生の購讀雜誌に就いても半ば同様である。

唯だ思想問題と直接關係あるものとして、文學書中第十二表の附表に示して置いたやうに、所謂プロレタリアート文學に對する愛好者は極く少數であつて、——附表中その他とあるは、一つは藏原惟人の藝術論であり、他は大杉榮の自叙傳である。假りにこれ等のものを此處に加へた。——未だ左程重要ではない。寧ろ一般には文學に對する學生の愛着は從來の所謂純文學の方面に存ると云つていゝ。(註)更らに自然科学の方面に於ける學生の愛讀書にあつては、それは一層彼等の趣味生活により即して居るものであることは讀者の容易に推測せられる所であらう。

第十二表 愛讀書(文學書)

	人員 (冊數)	職 業 別											總 計	地 位 別							
		農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無 職			不 明	無職	業主	重役	社員			
											I	II							III		
明治以前	(14)				3	5	2	3	2	1	7			23	8	10	3	2			
					1.8	1.6	11.8	5.8	1.5	2.3	4.5			2.3	3.5	3.1	2.8	0.8			
明治時代	15	7	1		23	46	3	7	18	7	32	8	2	154	47	46	8	43			
		13.2	16.7		13.9	14.7	17.6	13.5	13.4	16.3	20.8	24.2	5.0	15.1	20.4	14.2	7.3	16.9			
現代諸作家 (大正昭和)	61	11	1	6	36	93	4	10	21	11	23	7	4	227	41	78	33	54			
	(11)	20.8	"	50.0	21.8	29.7	23.5	19.3	15.7	25.6	14.9	21.2	10.0	22.2	17.8	24.0	30.3	21.3			
紀行文及隨筆	18	1			3	11		2	3	3	3	2	1	29	8	6	6	7			
	(1)	1.9			1.8	3.5		3.9	2.2	7.0	1.9	6.1	2.5	2.8	3.5	1.8	5.5	2.8			
諸文學全集	(10)	1			2	5	1	2		1	8	1		21	10	4	3	3			
		"			1.2	1.6	5.9	"		2.3	5.2	3.0		2.1	4.3	1.2	2.8	1.2			
文學研究家	7				2	10			3					17	2	11	2	2			
					"	3.2			2.2		1.3			1.7	0.9	3.4	1.8	0.8			
傳記類	(10)	1			4	10			3	1	5			24	6	6	4	7			
		1.9			2.4	"			"	2.3	3.2			2.3	2.6	1.8	3.6	2.8			
其の他、雜	3					6			1		3			10	3	4	2	1			
	(7)				1.9				0.7		1.9			1.0	1.3	1.2	1.8	0.4			
(吾國の著者及作品) 計	104	(21)	(2)	(6)	(73)	(186)	(10)	(24)	(51)	(24)	(83)	(18)	(7)	(505)	(125)	(165)	(61)	(119)			
	(53)	39.6	33.3	50.0	44.2	59.4	58.8	46.2	38.1	55.8	53.9	54.5	17.5	49.4	54.3	50.8	56.0	46.9			
ロシア諸作家	11	9			8	18	3	2	12	3	17	3	2	77	23	21	8	14			
	(1)	17.0			4.8	5.8	17.6	3.9	9.0	7.0	11.0	9.1	5.0	7.5	10.0	6.5	7.3	5.5			
北歐及獨逸諸作家	17		1	1	4	11	1	1	7	3	8	1		38	12	9	8	9			
	(1)		16.7	8.3	2.4	3.5	5.9	1.9	5.2	"	5.2	3.0		3.7	5.2	2.8	"	3.5			
フランス諸作家	16	4	1	3	7	21	5	8	13	1	16	1	1	81	18	23	13	19			
	(1)	7.5	"	25.0	4.2	6.7	29.4	15.4	9.7	2.3	10.4	"	2.5	7.9	7.8	7.1	11.9	7.5			
英米諸作家	26	2	1		10	12	1	3	6	2	4	4		45	10	12	8	13			
	(1)	3.8	"		6.1	3.8	5.9	5.8	4.5	4.7	2.6	12.1		4.4	4.3	3.7	7.3	5.1			
其の他	9				3	8			3	4		4		22	4	7	2	8			
	(7)				1.8	2.6			"	3.0		"		2.2	1.7	2.2	1.8	3.1			
文學研究書	(2)					1			1					2				2			
						0.3			0.7					0.2				0.8			
傳記類	2	1			2	1			1		2			7	2	1		3			
	(4)	1.9			1.2	"			"		1.3			0.7	0.9	0.3		1.2			
(歐米諸家及作品)計	81	(16)	(3)	(4)	(34)	(72)	(10)	(17)	(44)	(9)	(51)	(9)	(3)	(272)	(69)	(73)	(39)	(68)			
	(16)	30.2	50.0	33.3	20.6	23.0	58.8	32.7	32.8	20.9	33.1	27.3	7.5	26.6	30.0	22.5	35.8	26.8			
漢詩	(3)				1	1					1			3	1	1		1			
					0.6	0.3					0.6			0.3	0.4	0.3		0.4			
記入總數	185				37	5	10	108	259	20	41	95	33	135	27	10	780	195	239	100	188
	(72)																				
重複	15			4	41	100	12	15	34	8	56	9	2	296	73	93	38	70			
記入者數	22	5	6	67	159	8	26	61	25	79	18	8	434	122	146	62	118				
無記入者數	31	1	6	98	154	9	26	73	18	75	15	32	538	108	179	47	(136)				
		58.5	16.7	50.0	59.4	49.2	52.9	50.0	54.5	41.9	48.7	45.5	80.0	52.6	46.9	55.1	43.1	53.5			
實數	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254				

第十二表 附表

吾國のプロ文學	3	1	1	3	2		5	1						13	2		5
	(5)	1.9		8.3	1.8	0.6		9.6	0.7					1.3	0.6		2.0
その他	2			1	1									2	1		1
				0.6	0.3									0.2	0.3		0.4
計	5	(1)	(1)	(4)	(3)		(5)	(1)						(15)	(3)		(6)
	(5)	1.9		8.3	2.4	1.0		9.6	0.7					1.5	0.9		2.4

註 人員(冊數)欄中の數字中、括弧内の數字は著書名に依つて計算した數字であり、然らざるものは著作者の人員數を示す。

第十三表 愛讀書(自然科学に關するもの)

種類	職業別						總計	地位別		
	農	水産	工	商	交	公務員		無職	業主	電役社員
科学思想史及一般科学論	3	1	2	1	2	2	6	4	1	1
数学、物理及化学	4	16.7	1.2	0.3	2	1.5	0.6	1.2	0.9	0.4
地球物理学	12	1	0.6	2	1.9	1	4	1	1	2
頻繁及天文學	1.9	1	3	6	1.9	2.5	1.3	3	5	4
フーネル昆虫記	1	1.9	1.8	1.9	3	1	1.3	1.3	4.6	1.6
生(日本宣二氏生物學)	1	1.2	2	3	2	6	21	7	2	6
物(無産者生物學)	1	1.0	1.2	3	3.9	4.5	21	3.0	1.5	2.4
その他	6	0.3	1	1	1	1	1	1	1	1
計	(8)	(1)	(2)	(12)	(3)	(4)	(43)	(16)	(3)	(5)
人類學及考古學	7	1.9	2	2	5.9	7	21	9	2	6
無電に關するもの	4	1	0.6	1	1.9	0.7	8	1	4	1
航空機に關するもの	3	2	1	3	1.9	0.7	5	0.4	1.2	0.9
航空機に關するもの	3	3.8	0.6	1	3	1	1	1	1	2.8
山岳に關するもの	6	2	3	3	1	1.9	10	2	2	4
特に運動、趣味に關するもの	7	1.2	2	2	1.9	4.7	1.0	0.9	1.8	1.6
		0.6	1.2	2	2	2	7	3	4	4
		1.9	0.6	1.2	2	2	0.7	1.3	1.2	

その他	人数											
	6	1	1	1	3	1	3	12	4	4	1	3
無記名者	50	5	12	150	286	16	46	123	37	138	31	37
總計	94.3	85.3	100.0	90.9	91.4	94.1	83.5	91.8	86.0	89.6	92.9	92.5
電	54	6	12	165	322	17	53	136	45	156	35	40
實	1			10			1	2	2	2		20
	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40
				1.9	0.7	2.3	1.9	1.2	1.7	1.2	0.9	1.2
				1.9	0.7	2.3	1.9	1.2	1.7	1.2	0.9	1.2

唯だしかしその内科学思想史及び生物学に關するもの——フアール昆虫記に次いで讀まれてゐるのは、「その他」の項の内に入れたダーウィンの「種の起源」であつて、それは八名の愛讀者を有してゐる。故山本宣二氏の著「無産者生物学」の愛讀者の一名あるのは、第十三表中正に一つの異例である。——及び最後の「その他」の項目に入れた三名の哲学書愛讀者——内一名は唯物論哲學を愛するものである——が多少吾々の注意を喚起するに止まる。

註 純文學に對する學生の愛好は左の事實に依つて容易に推測せられ得るであらう。即ち吾國に於いて現代世間に通常第一流の作家と見做されてゐるものゝ多くは一人の愛好者も今回の被調査者中に有せず、その最も著名な某某氏の作品の如きも僅に一、二の學生に依つて愛讀せられるに過ぎない状態である。今假りに十人以上の愛讀者を有したる作家を挙げれば、凡そ次ぎの如くである。括弧内の數字は愛讀者たる學生數を示す。

- 夏目漱石(八五)、谷崎潤一郎(三五)、芥川龍之助(三四)、トルストイ(三〇)、ドストエフスキー(二六)、アンドレ・ジイド(二〇)、島崎藤村(一九)、ゲーテ(一七)、横光利一(一六)、石川啄木(一六)、シェクスピア(一三)、徳富蘆花(一二)、森鷗外(一二)。

六

平素學生が如何なる雑誌を読み、また如何なる新聞を購讀してゐるかに就いて、本項に於いて些かその調査の結果を示して置かう。

愛讀書の場合と異なり、學生間に於ける雑誌の購讀は遂に一般的であつて、調査人員の僅かに二割が、何等雑誌の購讀を明示しなかつたに過ぎない。雑誌中學生間に最も廣く讀まれてゐるものは綜合雑誌であつて、その購讀者の割合は正に全員中六割に達してゐる。その内最も廣く知られてゐるものは、先生の第十四表附表(1)に示して置いたやうに、「改造」の二二パーセントと「中央公論」の二十パーセント(共に全調査學生に對する割合)である。尙ほ第十四表に於いては二百種に達する多くの雑誌を十八種に分類して示して置いたが、事實はかくも多種の雑誌が擧げられてゐるに拘らず、その大部分は極く少數の讀者を有するに過ぎず、次ぎの附表(1)中に明かなやうに、「改造」、「中央公論」、「文藝春秋」、「キング」、「經濟往來」、「新青年」、「エコノミスト」、「セルパン」の八種のもが最も著名である。

一般に愛讀書の場合と同様に、雑誌も亦學生生活に於いては半ば彼等の研究心を養ふためのものではあるが、それと同時にそれは彼等の趣味、或は娯樂の生活の伴侶である。今假りにこれ等の方面を多少明かにせんがために、第十四表中の十九種の雑誌を三群に總括し、(a)を大體研究的な方面に關するものと見做し、(b)を趣味及び娯樂に關するもの、そして(c)を宗教及修養に關するものと見做してその數字を示せば、第十四表附表下段の結果を得得るであらう。

全體から見れば(a)及び(b)に對する割合は全く同率であつて、これ等に比較すれば、(c)の割合は甚だ微少である。即ち前者が共に全員の八割近くであるのに對して、後者は僅かにその二十分の一の約四分三に満たない。假に愛讀書に於いても、宗教に關してこれを擧げたものは僅かに全員の一割六分に過ぎなかつたのであるが、これにも増して此處ではこの方面の傾向は甚だ微弱であり、總じて吾々は、前述の如き最近の宗教問題に對する學生の關心あるに拘らず、學生の宗教心の未だ大なることを指摘し得ない状態にある。宗教的方面から離れて、大體學生の研究心の發露を右の(a)群の數字に就いて見るに、職業別に於いては無職Iの約六割を最低として、農業の九割八分を最高と見做し、商業の八割五分、無職IIの八割、公務、自由業の七割六分、工業の七割四分及び無職IIIの七割三分がこれに相次ぐ。これに對して(b)群の數字の間には左程大なる懸隔が存せず、凡そ農業の六割八分と工業の七割九分の約一割の間に他の職業のものが介在する。この點から見ると農業を最も顯著な場合として、商業並に無職IIの場合には明かに學生の研究心がその趣味及娯樂の生活にまさる、或はより正確には前述の注意を此處

第十四表 愛 読 雜 誌

種類(註1)	業 別										總計	地 位 別							
	職 別											無職業者	業主・電役社員						
	農	水	礦	工	商	交	實	公	白	無				II	III	不明			
I 學術雜誌(經濟、法律、社會、哲學及歴史)(註2)	14			5	8	1	2	7	2	2	6	2	2	33	8	14	9		
II 政治外交 = 關スルモノ(註3)	9			5	2.9	5.9	3.9	4	5.2	4.7	3.9	5.0	3.2	3.5	5	4.3	3.5		
III 經濟 雜誌	19	11	2	3	16	40	6	12.8	35.3	3.9	11.2	2	2	2.3	1.5	5	6	6	2.4
IV 宗教及修養 = 關スルモノ	14	1.9	1	4	2.4	4.5	2	2	2	2	5	2	3.7	3.9	9	15	6	7	2.8
V 綜 合 雜 誌	10	38	6	11	92	203	6	19	76	22	95	12	603	135	139	70	155		
VI 女 學 雜 誌	13	13.2	16.7	41.7	15.8	19.8	35.3	25.0	14.9	23.8	20.8	21.2	17.5	19.2	21.3	20.6	24.8	14.2	
VII 大 衆 (綜合) 雜 誌	6	8	1	5	26	62	2	18	19	6	21	3	5	15.5	30	45	21	44	
VIII 大 衆 興 樂 雜 誌	11	1	1	8.3	14.1	11.8	6	34.6	14.2	14.0	13.6	9.1	12.5	15.2	13.0	13.8	19.3	17.3	
IX 婦 人 雜 誌	7	4	1	1	9	50	9	22	3	29	4	4	5	15.7	36	58	15	41	
X (兒童 少年 研究 雜誌)	2	7.5	16.7	1	5.5	4.2	13.5	4.5	7	6	2	4	5.0	5.0	6	16	7	14	
XI 映 畫 及 演 劇 = 關スルモノ	17	4		1	12	0.3	1	1.9					0.5				2.8	0.8	
XII 音 樂 及 舞 踊 = 關スルモノ	9	7.5			13	16	2	5	6.7	2.3	7	2	1	6.0	10	18	12	15	
	(1)				5.1	11.3	9.6	3	3	1	2.6	1	2.5	5.9	4.3	5	11.0	5.9	
					7.9	5.1	7	7	1		3.0	1		2.2	2.2	2.6	1.2	4	
					3.1	2.2	5.8	0.7										1.6	

XIII 寫 眞 = 關スルモノ	7	3			8	2.6	3	5.8	2.2	4.7	2	1	2.3	2.3	5	2	3	8
XIV 運 動、登 山 及 旅 行 = 關スルモノ	19	4	1	11	10	8.2	11.8	2	8	7.0	0.6	1	4.4	4.7	15	12	3	
XV 科 學 雜 誌 (大 泉 田、無 體 等) = 關スルモノ (注4)	13	3	10	23	2	2	3.9	2.2	2.3	1	2	3	5.6	12	16	14	7	
XVI 軍 事 及 交 通 機 關 = 關スルモノ	9	5.7	6.1	7.3	5	5	5.8	6.1	7.5	5.5	5.2	4.9	5.2	4.9	12.4	2.8	5	
XVII 趣 味 = 關スルモノ	8	2	0.6	1.6	1	5.8	4.5	1	2	2	5.0	2	2.2	1.3	1.5	1.8	2.0	
XVIII 語 學 及 受 験 = 關スルモノ	7	3	8.3	1	0.3	1	3.0	4	3.0	1.9	6.1	2	1.2	2.2	0.3	1	4	
XX その他 (註4)	6	5.7	2.4	4	2.2	5.9	2.2	1.9	2.2	4	1.1	1	2.4	2.3	5	9	3	3
XX 無 記 入			0.3	5.9	1.9	1	0.6	6.1	2	0.6	6.1	2	6	3	3	1	1	1
總 計	207	10	2	38	61	3	11	26	7	33	8	17	217	217	48	63	18	57
電 復	46	6	17	130	269	24	56	102	21	130	26	25	842	167	250	130	202	
實 數	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254	

種類とは指名された雑誌の種類数である。但し同欄中括弧内の数字は特定の雑誌名を示すもののみである。

學術雜誌中經濟學部の學生に限り「三田學會雜誌」を挙げたものは總計これを除いた。

雑誌「法律時報」及び「警察協會雜誌」の各1つを此處に含め。

その他六種の雑誌は次ぎの如くである。「珠算研究」、「三田評論」 Geographic Magazine、「ハーロー・スィンクス」

Esquire, Voiki。以上の三つのみは調査者に取って正確不明のものとして扱った。



第十四表 附表

種類	職業別						總計	地位別									
	農	水	工	商	交	賃		無職	業主	雇役	社員						
改造	10	3	4	36	74	4	10	28	9	34	8	6	226	51	70	26	62
中央公論	15	2	4	32	74	2	2	21	6	38	6	4	207	51	63	32	50
セルバソ	28.3	33.3	"	19.4	"	11.8	3.9	15.7	14.0	24.7	21.2	10.0	20.3	"	19.4	21.1	19.7
往來	12	1	1	15	33	4	4	5	2	6	2	47	10	16	9	11	11
藝春秋	4	4	1	19	41	5	7	13	7	26	3	5.0	10.5	8.3	10.5	10.1	11.0
文藝	7.5	1	1	25.0	11.5	13.1	29.4	13.5	9.7	16.3	16.9	9.1	7.5	12.8	15.7	12.9	16.5
エッセイ	8	1	1	4	21	1	1	6	4.5	3.0	7	1	4.9	8	19	4	11
新青年	7	1	2	20	32	1	13	14	3	15	2	3	112	20	33	15	32
新青年	13.2	"	2	16.7	12.1	10.2	"	25.0	10.4	7.0	9.7	6.1	7.5	11.0	8.7	10.2	13.8
新青年	1	1	1	8	23	1	7	7	2	6	3	1	5.2	11	22	7	10
新青年	8.3	4.8	7.3	1.9	5.2	4.7	3.9	9.1	2.5	5.1	4.8	6.8	6.4	8.9	2.3	2.3	2.3
新青年	56	8	18	141	317	17	40	111	33	147	26	19	933	206	299	113	233
新青年	105.7	133.3	150.0	85.5	101.2	100.0	76.9	82.8	76.7	95.5	78.8	47.5	91.3	89.6	92.0	103.7	91.7
經濟評論	1	1	1	5.9	1	2	1	1	1	1	1	5	0.5	0.9	2	3	3
經濟評論	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.2
唯物論	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
社會評論	1	1	1	0.6	0.3	1.5	2.2	0.6	0.6	0.6	0.6	0.4	0.4	0.4	1.2	1.2	1.2

労働雑誌	歴史	科学	計	職業別											計	地位別		
				農	水	工	商	交	賃	無職	業主	雇役	社員	計		無職	業主	雇役
(a) XVIII	62	52	8	14	122	267	20	27	102	25	123	24	19	803	172	259	91	204
(b) VI---XVIII	128	36	2	13	131	240	18	67	101	30	112	24	29	803	166	247	124	183
(c) IV	14	1	1	4	14	4.5	2	7	5.2	4.7	1.3	1.6	1.7	2.2	1.6	1.7	2.2	2.0
(d) その他(註)	3						1.9	1.9	5.2	4.7	1.3	1.6	1.7	2.2	1.6	1.7	2.2	2.0
(e) XX	10	2	1	38	61	3	11	26	7	33	8	17	217	48	63	18	57	
總計	207	18.9	33.3	8.3	23.0	19.5	17.6	21.2	19.4	16.3	21.4	24.2	42.5	21.2	20.9	19.4	16.5	22.4
實	99	12	29	295	582	41	108	236	64	274	59	65	1864	397	534	239		
實	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	51	

註 この項に於ける三種の雑誌は第十四表中 註4に示した六種の雑誌中調査者に取つて不明のものである。そして他の三種の雑誌は本附表中(a)の内に入れて計算した。

に喚起して凡そ次ぎの如く云ふことが出来るであらう。即ち農業、商業及び無職IIの場合には他の職業の場合に比較して、趣味及び娯楽の生活に比すれば、學生の研究心がより大である。

吾々は更らに同様のことに關して職業上の地位別に因る相違に一言觸れて置かう。(a)群に就いては無職の七割五分を最低とし、重役の八割四分を最高に、その中間に業主と社員の場合が略同率の八割を占めてゐる。然し乍ら

第十 五 表 購 読 新 聞

	職 業 別										總 計	地 位 別					
												無職業主	雇 役 社 員				
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無			I	II	III		
東京朝日	37	4	7	104	186	7	26	77	24	95	20	23	610	139	180	77	151
東京日々	15	2	5	54	106	8	22	54	14	55	9	8	352	78	107	55	85
東京時事	11	2	3	55	93	4	19	39	8	41	10	10	296	59	93	44	74
報 知	13	2	4	39	80	4	16	31	11	29	5	13	247	45	76	44	53
都 都	5	2	2	10	34	1	4	2	4	7	4	5	74	11	28	10	13
中 外	1	1	2	5	17	4	4	4	1	9			43	10	16	9	7
國 民	3			3	4		2	2		1	1	1	17	2	5	2	4
日 本	1		1	1	2						1		6	1	2	1	1
帝 都	1											1	2				
日 々	1												2				
二 々	1												2				
六 六	1												4				
夕 夕													4				

毎日 (東京?)					1								1			2	1	1
や ま と	1												1			2	1	
東京夕刊新報				1									1			1		
英 文 日 々 (英文大阪毎日)	1			(1)	2								2			6	2	2 (1)
Japan Times					5	1							1			7	1	2 3
Japan Advertiser					1	2							1	1		5	2	1 1 1 1
Saturday Evening Post								1					1			1		1
法 律 新 聞					1								1			1		1
日 本 工 業 新 聞					1								1			1		1
帝 大 新 聞					1	1							3			3	1	1
横濱貿易新聞					1			1					4	2	2	4	2	
大阪朝日及百					2								3	1	1	1	1	
其の他の地方新聞	1				1	2							4			4		1 1 1 1
無 記 入	1			4	11			2			1	4	31	6	11	2	2	7
總 計	95	10	26	292	573	32	100	224	69	258	53	67	1799	380	554	262	421	
重 複	42	4	14	127	260	15	48	90	26	104	20	27	777	150	231	153	167	
實 數	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254	

吾々はこの場合直ちに、重役の子弟がその研究心に於いて他のものに勝るとは確言し得ない。何んとなれば第十四表本表の示してゐるやうに、第一に重役の場合には學術雜誌の愛讀者は皆無であり、第二に半ば趣味的であると見做される綜合雜誌に對するその割合が他の何れの場合よりも明かに大であるからである。且つまた各欄の(a)及(b)群の數字を比較して見ると、その他の何れの場合にも(b)群の數字が(a)群の數字に多少とも劣つてゐるに拘らず、重役の場合にはそれは全く反對であり、且つその反對の傾向が甚しく、即約三割の開きを以つて現はれてゐる。少くともこの著しい傾向は、重役の子弟の場合には明かに他のものに比較して、その家庭環境の基礎の上に於いてのみ説明せられ得る所であらう。

最後に思想的傾向の表現に就いて一言觸れて置かう、第十四表附表(2)に抽出したものはマルクシズム的傾向の雜誌と見做されるものであるが、その全體の割合は甚だ小であり、必ずしも吾々はその重要性を認め得ないが、唯だ此處に於いても一方先きの社會科學書に於けると同様公務、自由業に屬するものが多大なる割合を依然示して居る。しかし、これに反して無職IIの場合は全く一致しない傾向をその數字の上に現はしてゐるやうである。更らに職業上の地位別の方から云へば、特に重役の子弟にこの方面の雜誌の購讀者が一人も現はれてゐないことが、或は注目すべき事實かも知れない。

購讀雜誌に次いで、學生の日常通觀する新聞を挙げれば第十五表の如くである。學生の通讀新聞から、吾々は彼等の思想的方面を云々するには余りに不充分であり、且つ不正確でもある。唯だ例へば、「日本」の愛讀者が極少數でも存在することが先づ擧げらるべき事實であらうが、概して吾國の一般の新聞はその殆んど總てが、政黨的色彩と同様に思想的配色の相違が甚だ少ないのは、既に何人も認める所である。

第十五表を見れば其處に種々なる特殊新聞が擧げられてゐるのが知られるが、その何れも通觀者の數が甚だ小である。強いて云へば「中外商業新報」の讀者が多少存するやうであるが、その多くは東京在住の商家の子弟のものがこれを示して居り、従つて或はそれは彼等の家庭の購讀新聞といふ意に解すべきであるかも知れない。更らに讀者のために、さすがは本塾の學生であるためか、「東京時事新聞」に對する愛讀者が可成り多いことを指摘して置かう。

## 七

學生が、如何なる人物を自己の好む所とするかを知ることによつて、幾分なりとも彼等の生活の思想的方面を窺知し得る。蓋しそれはまた彼等の主觀の一つの表現であり、彼等の思想生活の一面の現はれであるからである。しかし乍ら凡そ人が他人を愛好し、尊敬するの念は人を異にして各々その標準を異にする。或るものは他人の思想をまたその業績を、或はその名譽と地位を、更らに或は他人の人格そのものを觀て他を顧みないといふが如くである。それ故に如何なる意味に於いて他人を愛好し、尊敬するかと明確であることを必要とする。そしてこのためには學生の尊敬せる人物を種々の角度から分類することが望ましいのであるが、既に本論も相當の紙數を費したので、その詳論はまた別の機會に譲ることとし、此處では調査結果に就いて二三の事實を指摘するに止める。

第十六表 學界人物

人	業 別										總計	地 位 別						
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無		職	不明	無職業主	重役社員			
吾國經濟學者	50	29	4	8	58	112	6	3	3	1	2	1	3	385	95	120	43	85
外國經濟學者	13	1			9									25	4	5	7	6
經濟學者計	(63)	(30)	(4)	(8)	(67)	(115)	(9)	(17)	(52)	(27)	(56)	(16)	(9)	(410)	(99)	(125)	(50)	(91)
法律學者	13	5	2	12	24	1	2	12	3	16	1	1	79	20	31	10	11	
政治、外學(社)會、評論家	4	3	33.3	7.3	7.7	5.9	3.9	9.0	7.0	10.4	3.0	2.5	7.7	8.7	9.5	9.2	4.3	
哲學者	4	3		8	11			3	1	4		1	32	5	4	7	11	
外學哲學者	7	1			4.8	3.5			2.2	2.3	2.6		3.1	2.2	1.2	6.4	"	
哲學者計	(14)	(1)			(5)	(12)			(2)	(1)	(4)		(1)	5.0	3	2	1	1
教育學者及宗教家	5	6		1	14	34	3	5	16	4	19	3	3	10.8	26	32	15	25
歴史家	4	4	7.5	8.3	8.5	10.9	17.6	9.6	11.9	9.3	12.3	9.1	7.5	10.6	11.3	9.8	13.8	9.8

文( )ハ、外	者人	(11)	業 別										總計	地 位 別				
			農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無		職	不明	無職業主	重役社員	
自然科學者	15	3	1	11	20	3	3	9	2	4	4	3	1	20	4	10	1	4
(外國人ノ場合)	7	1		3	6		6	2		4	1	1	24	5	6	4	6	
自然科學者計	(22)	(4)	(1)	(14)	(26)	(3)	(9)	(11)	(2)	(8)	(5)	(4)	(87)	(15)	(24)	(11)	(28)	
その他	12	2		3	5	1	1	1	1	5	1	1	14	7	1	1	3	
無記人者	11	1	6	61	110	7	23	44	11	52	10	20	346	73	119	30	98	
總計	(30)	135	8	15	186	352	24	56	144	51	173	37	41	1155	261	365	128	278
重複	15	2	3	21	39	7	4	10	8	19	4	1	133	31	40	19	24	
實數	159	53	6	12	175	313	17	52	131	43	154	33	40	1022	230	325	109	274

註 學生の好む知名の人物に關する記入は讀書の場合と同様に、今回の「學生生活調査票」に於いては學界、政界、實業界、女性人物、及びその他の五部に分けて、學生をしてその各方面に就いて自由に記入せしめることとしたのであるが、此處ではその内前の三つの方面に關する調査の結果だけを利用することとする。

先づ第十六表は學界の人物に關する結果を、各學者の専門的方面の如何に従つて分類集計したものである。この内外經濟學者が、最も多く擧げられてゐるのは、正に社會科學に關する愛讀書の場合と同一理由に基き、多數の學生の最もよく熟知せる方面が經濟學の範圍内にあるに因ること勿論である。經濟學者に次いで教育家、教育學者、學生生活の思想的方面の一調査

人員	職業別										總計	地位別					
	職業											無職	業主	雇役	社員		
	農	水	工	商	交	實	公	自	無	職						不明	
I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III			
福澤 諭吉	6			13	28	3	4	16	4	18	2	3	98	24	29	12	23
小泉 信三	11.3			7.9	8.9	17.6	7.7	11.9	9.3	11.7	6.1	7.5	9.6	10.4	8.9	10.0	9.1
高橋 誠一郎	19	2		30	61	3	10	31	12	27	9	4	211	48	65	24	48
林 毅	35.8	33.3		25.0	18.2	19.5	19.3	23.1	27.9	17.5	27.3	10.0	20.6	20.9	20.0	22.0	18.9
美濃部 達吉	4	2		6	9		3	6	5	2	2		6.3	5.2	7.4	8.3	5.5
野口 英世	7.5	1		1.9	1.9		5.8	4.5	11.6	3.2	6.1		6.3	5.2	7.4	8.3	5.5
徳富 猪一郎	4						3.9	3.7	2.3	1.9	6.1	3	3.3	6	6	7	7
A. Einstein	7.5						3.9	3.7	2.3	1.9	6.1	3	3.3	6	6	7	7
河合 英次郎	1			0.6	1.3		2	1		0.6	1	1	10	1	5	5	1
本多 光太郎	1.9			1	3		3.9	0.7		3	1	1	1.0	0.4	1.5	0.9	0.8
K. Marx	1			3	3		1.9	1.1		1.9	3.0		0.9	1.3	0.3		2
(1) 大學 總長	13			7	18		2	6	2	3	2	1	46	7	18	5	10
	9.4			4.2	5.8		3.9	4.5	4.7	1.9	6.1	2.5	4.5	3.0	5.5	4.6	3.9

(2) 實	職	職業別										總計	地位別				
		農	水	工	商	交	實	公	自	無	職		不明	無職	業主	雇役	社員
{(1) 福澤、小泉、林、河合、本多、K. Marx}	16	32	2	4	56	116	6	16	56	19	13	81	82	115	47	130	130
{林、河合、本多、K. Marx}	60.4	33.3	33.3	33.9	57.4	35.3	30.8	41.8	44.2	32.5	33.4	20.0	37.0	35.7	35.4	43.1	35.4
實	63	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254

及び宗教家に対する學生の尊敬の度が約一割であり、これに次いで内外自然科学者が調査學生の八分五厘のものに依つて擧げられてゐるのは一つの注意すべき事實である。何んとなれば吾々の調査學生は總て自然科学の研究に従事するものでないからである。そして學生の自然科学者——此處に醫學者を含む——に對する尊敬の念はその大部分は、勿論その業績の偉大なることに對する傾倒であると考へられるが、その内には自然科学に關する愛讀書の場合と同様に、直接には彼等學生の趣味生活に關聯して學者の名を示したと思はれるものが數名あつた。

第十六表附表の一は事實何人に對して學生の注意が集中してゐるかを知らるために作成されたものである。これに依ると調査學生の二割のものは學者としての小泉現塾長に對して敬愛の念を有するものであつて、かくの如き事實は確かに吾々の學園に取つて正に悦ぶべきことの一つであらう。尙ほ同附表下段に參考のために、當つて大學總長であり、或はまた現に各大學の總長である人々に對する學生の尊敬の度を表はして見た。それは學者としての一つの最高の社會的地位に對する學生の關心を知らんがためである。しかしこの事實は本塾の關係者を除いては必ずしも大ではない。

第十六表の附表の二は附表の一と共に學生の思想生活を知るに多少の意義を有するであらう。先づ調査學生の全

第十六表 附表 二

人	職 業 別					無職	不明	總計	地 位 別								
	農	水	工	商	交				公務員	無職	業主	重役	社員				
I 義塾現教員 社(1)	26	4	5	57	109	7	16	44	21	43	14	6	352	78	108	46	84
II 故義塾教員 社(2)	491	66.7	41.7	34.5	34.8	41.2	30.8	32.8	48.8	27.9	42.4	15.0	34.4	33.9	33.2	42.2	33.1
III (I+II計)	517	70.7	47.4	69.0	75.6	48.4	37.6	56.8	69.6	70.7	56.4	20.0	68.8	67.8	66.4	84.4	66.2
IV Marxist	17	2	3.8	14	6	1	5	3.7	2.3	5.2	1	1	3.7	3.9	4.3	5.5	2.4
V Journalist	19	10	1.8	3.5	1.9	5.9	1	5	1	8	2.5	1	3.8	9	14	6	6
VI 自然科学者	22	4	1	14	26	3	9	11	2	2	1	2	52	18	10	3	8
VII 教育及宗教学家	5	7.5	16.7	8.5	8.3	17.6	17.3	8.2	2	8	5	4	87	15	24	11	28
總計	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254

註(1) 加藤元一教授を此處に加へなかつた。主たる理由は吾々の調査學生は醫學部のもを取扱はなかつたからである。  
 註(2) 註(1)の場合とは反對に、此處に故北里柴三郎博士を加へることをする。

員が日常接觸する現本塾教授に對する學生の尊敬の程度は甚だ高く三割五分に近い數字を以つて現はれてゐる。

これに對して福澤先生を初めとして、故本塾諸教授に對するものを加へれば、調査學生の四割五分のものが此處に總括せられることとなる。このことは一面に於いては先きに小泉現塾長に關聯して述べた事實を更に強化することとは事實である。しかしまたその反面からすれば、學生の大部分が未だ多くの學者を知らないといふ或は必ずしも樂觀を許さない事實の反映であるかも知れない。それは兎も角として既にかくの如き事實から、吾々は學生とその教師との關係の裡に彼等の思想生活に對する重要な影響が存することを見逃す譯けに行かぬ。そしてこのことは特に農業及び無職のI、更らに重役の子弟の場合に甚だ顯著である。

更らにマルクス並にマルクシスト的學者に對する學生の尊敬は第十六表の附表の一及び二に依つて明かなやうに、それは必ずしも大であることは云へぬ。しかしこの事實は吾々の無視し得ない所である。そして工業と重役の場合には他の場合に比較してその割合が稍々高い。

次に附表の二中に分類した學者は總て常に新聞及雑誌を通じてその見解が學生に知られる所のものであるが、それ等の學者に對する學生の尊敬はまた必ずしも大ではないが、特に農業、これに次いで無職のIIの場合には他に比して著しく高い。それが如何なる理由に基づくかは容易に推測し難いけれども、吾々は此處に學生の思想に對するジャーナリズムの影響を全然無視し得ないことを知れば足りる。

第十七表は政治家に對する學生の尊敬の傾向とその程度を示さうとしたものである。

第十七表の示す事實から吾々は二三の稍々興味ある點を指摘することが出来るやうである。先づ吾國の現在の政

第十七表 政界人物

人員	職業別										總計	地位別							
	業					別						無職	業主	電役	社員				
	農	水	鑛	工	商	交	實	公自	無	職	不明					I	II	III	
現政友會員	2			4	13		1	4	1	3		28	4	15	1	6			
現政友會員	3.8			2.4	4.2		1.9	3.0	2.3	1.9	2.7	1.7	4.6	0.9	2.4				
國民同盟員	7	2		1	8.3	3	4	5	5	3	4.1	1.3	1.5	10					
國民同盟員				4.8	2.9	17.6			11.6	3.2	4.0	5.7	4.6	3.9					
無産黨(阿部)	2			3	3		2	2	1	1	10	2	4	4					
無産黨(阿部)				1.8	1.0		1.5	1.5	2.3	2.3	1.0	0.9	1.3	1.6					
無産黨(阿部)	2	1		0.6	0.3		1	3	2	2	0.9	2	1	5					
無産黨(阿部)	1.9			0.6	0.3		1.9	2.2	1.3	1.3	0.9	0.9	0.3	2.0					
現政黨政治家	(20)	(5)		(1)	(16)	(26)	(3)	(2)	(13)	(7)	(10)	(4)	(1)	(88)	(21)	(35)	(1)	(25)	
計	94	20		8.3	9.7	8.3	17.6	3.3	9.7	16.3	6.5	12.1	2.5	8.6	9.1	10.8	0.9	9.3	
現所屬(曾つて政黨員たりしものを含む)政治家	8	37.7	3	50.0	50.0	28.5	38.2	29.4	30.8	34.3	34.9	31.2	27.3	22.5	32.1	31.3	31.1	33.0	33.5
樞府、貴族院	7	3	1	2	2	2	2	1	2	2	1	1	2	14	14	1	5	2	1
樞府、貴族院	5.7	16.7	1	1.2	0.6		1.9	1.5	1.5	2	3.0	5.0	1.4	0.4	1.5	1.8	0.4	1.4	0.4
官俵政治家	5	6		1	10	22		4	5	1	6	1	4	60	8	17	8	17	1
官俵政治家	11.3			6.1	7.0		7.7	3.7	2.3	3.9	3.0	10.0	5.9	3.5	5.2	7.3	6.7	6.7	1.7
軍部出身政治家	4	1		3	7		1	1	1	2	2	2	2.4	11	1.8	2	2	3	3
軍部出身政治家	1.9			1.8	2.2		1.9	0.7	4.7	4.5	6.1	2.3	4.8	1.8	1.8	1.8	1.2	1.2	1.2
その他	10			4	6	2	2	1	1	3			17	4	2.2	2.8	3	3	3
その他	4			2.4	1.9	11.8		2.3	1.9	2.3	1.9		1.7	1.7	1.7	2.2	2.8	2.8	2.8
明治時代の政治家	7	4		7	7		2	4	4	2	2		3.2	9	8	3	3	3	3
明治時代の政治家	7.5			4.2	2.2		3.8	3.0	4.7	4.5	8		3.2	9	2.5	5	5	5	5
故政友會員	5	3		10	20		2	4	3	3	1	1	1	5.4	9	17	12	12	12
故政友會員	5.7	33.3		6.1	6.4		7.7	2.2	2.3	2.3	5.2		2.5	5.3	5.2	11.0	4.7	4.7	4.7

故政黨員	4	1		9	14	1	2	11	3	12	1	3	5.7	16	13	6	18		
故政黨員	1.9			5.5	4.5	5.9	3.8	8.2	7.0	7.8	3.0	7.5	5.6	7.0	4.0	5.5	7.1		
その他	4	1		2	1		2	2	1	1		7	1	2	2	2	2		
その他	1.1			1.2	0.3		1.5	0.6	0.6	0.6		0.7	0.4	0.6	0.6	0.9	0.8		
英國政治家	6			3	6	3	1	2	4	4	1	2.4	3.9	8	3	4	4		
英國政治家				1.8	1.9	17.6	1.9	9.3	2.6	3.0		2.3	3.9	2.5	2.8	1.6	1.6		
米國政治家	2	2		2	3	2	1	1	1	1		1.1	1	2	1	5	5		
米國政治家	3.8			1.2	1.0	11.8	0.7	0.7	0.6	0.6		1.1	0.4	0.6	0.9	2.0	2.0		
獨逸政治家	3			6	2.6	2	2	7	4	4	1	3.2	7	9	3	12	12		
獨逸政治家				3.6	2.6	2	3.8	5.2	4.7	3.0		3.1	3.0	2.8	2.8	4.7	4.7		
佛國政治家	3			1	1	1	1	1	1	1		6	3	3	1	1	1		
佛國政治家				0.3	0.3	1.9	0.7	2.3	0.6	0.6		0.6	1.3	0.3	0.9	0.4	0.4		
伊國政治家	2			1	2	1	1	2	2	2		9	4	1	2	1	1		
伊國政治家				0.6	0.6	5.9	1	4.7	1.3	1.3		0.9	1.7	1.8	1.8	1.2	1.2		
ソヴェート政治家	3			3			2	1.5				5	2	2	3	3	3		
ソヴェート政治家				1.8			1.5					0.5	0.6	0.6	2.8	2.8	2.8		
その他(チエツコ・支那)	2			1							1	2	1	1	1	1	1		
その他(チエツコ・支那)				0.6							3.0	0.2	0.4	0.9	0.9	0.9	0.9		
無記入	13	1	6	57	108	4	18	39	7	53	13	20	33.9	73	130	34	74		
無記入	24.5	16.7	50.0	34.5	34.5	23.5	34.6	29.1	16.3	34.4	39.4	50.0	33.2	31.7	36.9	31.2	29.1		
總計	95	59	7	14	183	337	25	55	140	48	167	35	40	1110	250	352	122	275	
總計				6	1	2	18	8	3	6	5	2	88	20	28	13	20		
重複				1	2	24	8	3	6	5	13	2							
實數				53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	325	109	254

治家中何れかの政黨に屬するものに対する學生の敬愛の念は稍々薄し。そしてこのことは重役の子弟の場合に特に明確である。このことから吾々は現在の吾國の政黨に対する學生の信頼の度が寧ろ薄いと云はなければならぬ。

	職業			業別			總計	地校別									
	農	水	職	工	商	交		實	公	無	職	不	計	無職業主	雇役	社員	
高橋是清	11	1	23	46	3	8	19	6	26	4	6	153	35	43	15	41	
尾崎行雄	208	167	8.3	13.9	14.7	17.6	15.4	14.2	11.6	16.9	12.1	15.0	15.2	13.2	13.8	16.1	
廣田弘毅	7	2	5	16	1	4	16	6	16	2	3	114	23	35	15	27	
濱口雄幸	132	33.3	41.7	9.7	11.8	5.9	7.7	11.9	11.6	10.4	6.1	7.5	11.2	10.8	13.8	11.4	
犬養毅	4	1	5.5	6.4	20	3	4	4	5	1	3	51	7	16	7	14	
望月圭介	1.9	1.9	3.0	4.5	5.9	1	8	3.0	2.3	3.0	3	4.4	3.0	4.9	6.4	2.4	
ヒップラー	2	3.8	1.8	2.6	1	1.9	7.7	4	2.3	2.6	27	2.6	2.2	2.5	6.4	7	
伊藤博文	3	5.7	5	5	1.6	2	6	1	1.3	3.0	24	2.4	4	5	2	10	
若槻禮次郎	2	3.8	3.0	1.6	1.2	1.3	4.5	1	2.6	1	2.3	1.7	2.6	1.5	1.8	3.9	
原敬	1	1	2	5	5	2	2	1.5	1.9	3	1.7	1.7	4	0.9	2	5	
計	1.9	16.7	1.2	1.6	7.6	154	7	24	65	19	75	10	16	2.5	0.9	2.0	
實數	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254

うである。そしてこのことが最近の政黨不振の傾向の、現在の學生の意識に於ける反映であるとも考へられる。しかし、一般に政黨政治に對する學生の信頼は單にそれだけの事實を以つて結論することは勿論早計である。蓋し故政友會並に民政黨(憲政會)に屬してゐた政黨政治家に對する學生の敬愛の度を加へれば、尙ほ全體としての政黨政治家に對する學生の信頼は相當大であると云はなければならぬからである。

第十七表中無所屬政治家中に分類したものは、この學生調査の行はれた當時(本年六月)現在の何れの政黨にも屬せず、それから離れてゐたものであつて、同表中他の部類に屬さないものである。此處に屬する政治家に對する學生の信頼の度が甚だ大であるのは、第十七表附表に依つて知らるゝやうに、主として高橋是清、尾崎行雄並に望月圭介の三氏に對する、特に前二者に對する學生の信頼が甚だ大であるのに因る。

唯だ右の諸事實と、第十七表附表中に示した濱口雄幸、犬養毅、若槻禮次郎及び原敬の四氏に對する場合に比して、鈴木喜三郎氏を擧げた學生は僅かに六名に過ぎないことを同時に考慮すれば、——學生中町田忠治氏の名を擧げたものは更らに少なく僅かに四名ではあるが、——現在の政友會が吾國最大の政黨であるにも拘らず、學生間に甚だ信頼が薄いといふことは確かであらう。

政黨政治家に對する場合の外、吾々は此處に吾國の現在の政治家中官僚政治家と軍部出身の政治家に對する學生の敬愛の度を比較すれば、一つの興味ある反對的傾向が存するのを知ることが出来る。先づこの兩者に屬する政治家を信頼する學生の數は共に少數であつて、従つて左に述べる觀察がどれだけ確實であるか多少疑念なしとしない



のであるが、筆者達の調査の結果は次ぎの事實を物語つてゐる。即ち、官僚政治家——此處に五人の政治家を分類したのであるが、學生の信頼は専ら現外相廣田弘毅氏に集中してゐることは、第十七表附表に依つて知らるゝ通りである——に對する信頼は農業、工業、商業及び公務、自由業の場合に強く、無職の場合に弱い。これに反して後者の場合は軍部出身の政治家に對する信頼の強いのに對して、前者の場合は軍人政治家を信頼することが弱い。この一つの反對的な傾向が如何なる理由に基づくか。吾々は先きに述べた理由に従つて暫らく單に事實を傳へるに止めて置くことが至當であらう。

前述の如く現在の政黨不振の事實は略々學生の意識に反映してゐると云ふことが出来るやうであり、また最近の吾國に於ける政治的事情から觀て、官僚政治家並に軍人政治家に對する學生の信頼は相當に現はれて居る。がしかし第十七表附表に示して置いたやうに、高橋是清及び尾崎行雄兩老政治家に對する學生の信頼が甚だ大であることは、多くの學生の自由主義的思想の一つの表明である。この外、レーニン、スターリン及びカガノヴィッチの三人を信頼する極少數の學生の存するのに比較すれば、一人のヒットラーに對する學生の信頼が遙かに大であることも亦、吾々の注意に價ひするであらう。

第十八表は學生の尊敬せる實業家を大體その主たる關係事業の方面に従つて假りに分類集計したものである。同表に依つて明かなやうに、此處に最も顯著なる事實は小林一三氏に對する學生の甚だ大なる愛好の念の存することである。即ち調査學生全員中約三割のものが自己の好む人物として小林一三氏を指名してゐる。これは明かに最近

に於ける同氏の興行界の事業經營に於ける躍進に對する學生の關心が然らしめたのは明かである。そして吾々はこの事實に於いて、學生の青年として意識の活動的であり、進歩的である方面が小林氏の最近の活動に對する同感として表現せられてゐると見ることが出来るであらう。

註 小林一三氏に次いで、十人以上の學生が尊敬し、信頼せる實業家は次ぎの諸氏である。括弧内の數字はその學生數を示したものである、

池田成彬(六五)、武藤山治(六二)、澁澤榮一(四〇)、藤原銀次郎(三〇)、ヘンリー・フォード(二四)、津田信吾(二三)、深井英五(一一)。

最後に左の一事を指摘して置くのも強ち無用でもあるまい。讀者は第十六、七及び八表の各々に於ける無記入者の割合を比較して見よ。全體としてのその割合にはこの三つの場合に必ずしも大なる相違が存するとは云へない。しかも尙ほ第十八表に於ける無記入者の割合が二五・三パーセントで最少を示し、第十七表に於いては三三・二パーセントであり、第十六表に於いては三四・八パーセントで最高を示してゐる。このことは一般に學生の實業家、従つてまた實業界に對する關心の度が比較的に大であることを物語つてゐると云つていゝのであり、それは既に本論の最初に第二表に於いて大體示して置いたやうに、學生の大部分が、卒業後實業界に職を求めやうと企圖してゐることの寧ろ當然の結果であると云はねばならない。それにしても吾々は青年學徒としての學生の學界に對する關心が稍々これに劣つてゐることを悲しまざるを得ない。

## 八

人員	職業別						總計	地位別								
	農	水産	工	商	交貨	公自		無職	業主	電役	社員					
小林	1	2	2	5	4	20	36	12	42	6	9	2	6	10	33	74
一	15	2	2	92	4	20	36	12	42	6	9	2	6	10	33	74
三	283	33.3	16.7	33.3	29.4	23.5	33.7	26.9	27.9	18.2	22.5	23.9	24.1	31.1	30.3	29.1
面	(2)			2	2	2	7	1	3	1						
業	23			12	0.6	11.8	1.9	2.2	2.3	1.9	3.0					
方	14			23	55	3	7	13	6	22	6	4	163	34	52	26
面	(2)			36.4	50.0	16.7	13.9	17.6	13.5	13.4	14.0	14.3	18.2	10.6	15.9	14.8
商	31			7	2	18	48	2	6	22	9	27	7	5	15.1	43
業	(3)			13.2	33.3	8.3	10.9	15.3	11.8	11.5	16.4	20.9	17.5	21.2	12.5	14.7
方	4			4	6	1	1	1	1	1	1	2	1.5	0.9	2.2	
面	4			2.4	1.9	5.9	1.9	0.7	1.3				1.5	0.9	2.2	
交													1.5	0.9	2.2	
通													1.5	0.9	2.2	
業													1.5	0.9	2.2	
方													1.5	0.9	2.2	
面													1.5	0.9	2.2	
財													1.5	0.9	2.2	
閥													1.5	0.9	2.2	
巨													1.5	0.9	2.2	
頭													1.5	0.9	2.2	
財													1.5	0.9	2.2	
界													1.5	0.9	2.2	
世													1.5	0.9	2.2	
話													1.5	0.9	2.2	
業													1.5	0.9	2.2	
者													1.5	0.9	2.2	
財													1.5	0.9	2.2	
界													1.5	0.9	2.2	
出													1.5	0.9	2.2	
身													1.5	0.9	2.2	
政													1.5	0.9	2.2	
治													1.5	0.9	2.2	
家													1.5	0.9	2.2	
そ													1.5	0.9	2.2	
の													1.5	0.9	2.2	
他													1.5	0.9	2.2	
者													1.5	0.9	2.2	
無													1.5	0.9	2.2	
記													1.5	0.9	2.2	
人													1.5	0.9	2.2	
者													1.5	0.9	2.2	
總													1.5	0.9	2.2	
計													1.5	0.9	2.2	
電													1.5	0.9	2.2	

實	數	53	6	12	165	313	17	52	134	43	154	33	40	1022	230	325	109	254
---	---	----	---	----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	----	----	------	-----	-----	-----	-----

註 人員欄中括弧内の數字は外國人實業家の數であつて他の數字は吾國實業家の數である

最後に時事問題に對する學生の態度に就いて關説しやう。時事問題に關しては、「學生生活調査票」中に次ぎの如き注意が豫め與へられてあつた。即ち「近時に於ける時事問題中最も興味を惹けるもの。それに對する見解を略述する事。」として調査票配布に際しては學生に對して「近時」なる言葉に就いて、大體最近過去一年間位の間といふ注意を與へた。かくて調査票のこの項目に就いては調査學生の六割五分のもの、記入解答を得た。そして其處に指摘せられた問題は甚だ廣範圍に渡つて多種であつた。且つまた假令同一の問題が指摘せられてゐても、それに對する學生各自の見解、即ち彼等の態度は決して同一ではなく、これまた各々趣きを異にしてゐる。従つて此處に擧げられた時事問題、並にそれに對する學生各個人の種々なる態度を適當に處理し、その統計的結果を導き出すことは簡単な仕事ではない。しかもかくの如き處理をこの問題に加へることが必要であり、且つその結果が吾々の本論に於ける問題に取つて最も重要な資料を提供して下れるものであることは素より明かである。蓋し本論の前諸項に於いて取扱つた諸點の何れのものよりも一層よく、時事問題に對する學生の態度を詳細に知ることは即ち彼等の社會的態度を知ることであり、従つて其處に赤裸々に表明せられる彼等の思想を採及し得るからである。しかしこの問題を詳論するためには本論は既に餘りに多くの紙數を費し過ぎて居り、従つてこの問題は更めてそれ自體一個の問題として取り扱ふ方が寧ろ適當である。従つて甚だ不本意ながら、此處では吾々の調査の結果を至極簡單に傳へて、

	職業別										總計	地位別					
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	無	職		不	無職	業主	重役	社員	
國內的問題	20	3	3	60	120	6	16	37	21	53	17	6	362	91	130	43	69
日滿支蘇、極東問題	37.7	50.0	25.0	36.4	38.4	35.3	30.8	27.6	48.8	34.4	51.1	15.0	35.4	50.6	40.0	39.4	27.2
歐米の問題	13	2	2	37	70	5	14	28	10	35	5	7	228	50	69	29	60
世界的問題	24.5	33.3	16.7	22.4	22.4	20.4	26.9	23.3	22.7	15.2	17.5	22.3	21.7	21.2	26.6	23.6	20.8
記入者數	11	1	2	16	49	1	5	28	9	26	12	10	170	47	41	15	44
重複	1	1	1	9.7	15.7	5.9	9.6	20.9	16.9	36.4	25.0	16.6	20.4	12.6	13.8	17.3	13
無記入者數	1.9			8.3	3.8	17.6	4.5	6	5.2	3.0	2.5	3.2	3.9	2.2	1.8	5.1	1.9
實	45	6	8	113	251	15	35	99	40	122	35	24	793	197	247	89	156
記入者數	35	5	8	99	208	11	32	87	32	99	25	18	659	156	211	74	160
無記入者數	18	1	4	66	105	6	20	47	11	55	8	22	363	74	114	35	94
實	94.0	16.7	33.3	40.0	33.5	33.3	38.7	35.1	25.6	35.7	24.2	55.0	35.5	32.2	35.1	32.1	37.0
實	53	6	12	165	313	17	52	134	48	154	33	40	1022	230	325	109	254

本論の結論に急がうと思ふ。

學生の興味を惹ける時事問題を至極廣範圍に分類し、それを國內的問題、日滿支蘇並に極東問題、歐米の諸問題

世界的問題の四群に總括して観ると、第十九表に示されてゐるやうに、學生の關心は甚だ自然的な傾向を現はしてゐることが先づ知られる。即ち交通業並に無職のIIIの場合を例外として、他の場合には何れも國內的な諸問題に對して關心を持つ學生の數が最大であつて、世界的な問題に對して關心を有するもの、數が最少である。このことは多くの場合に吾々の生活そのものに最も近接してゐるものが、先づ吾々の關心を惹くことの自然的な傾向を現はしてゐると見られる。

右の四群に總括した諸問題を更らにより具體的に示したものは、第十九表の附表の一乃至三である。讀者はこれ等の諸表に就いて學生の關心が如何なる社會的時事問題に分布してゐるかを多少詳細に知り得るであらう。

即ち國內的な諸時事問題としては政治的方面の諸問題に學生の關心が最も強く現はれてゐる。しかもそれはより具體的に云へば政治問題化された美濃部博士の憲法學說問題に對して最大である。即ち調査學生の一〇・六パーセントのものがこの問題に對する關心を示してゐる。そしてこの問題に對する學生各自の態度を詳細に分析すれば、其處に吾々は若き學徒としての彼等の態度を發見し得るのであるけれども、それを詳細に此處に示すことは前述の如くにして暫らく後の問題として割愛して置かう。

國內の政治的問題と殆んど同様に多くの學生の關心を惹いたのは日支問題（及び銀問題）である。就中時事問題としては、第十九表附表の二が示すやうに、北支事變に對する學生の興味が甚だ大である。そしてこの問題に對する學生の態度の如何は、本項に於ける吾々の問題の解明の一例として後に示して置かう。

(國內諸問題)	職 業 別											總 計	地 位 別					
	農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無 職			不 明	無 職	業 主	重 役	社 員	
										I	II							III
美濃部問題	8	2	1	19	36	2	4	14	1	17		2	106	18	40	11	25	
内閣審議會	15.1	33.3	8.3	11.5	11.5	11.8	7.7	10.4	2.3	11.0		5.0	10.4	7.8	12.3	11.1	9.8	
政黨及選舉問題	1			5	10		1	1	2	5		1	26	7	8	3	6	
財政問題	1.9			3.0	3.2		1.9	0.7	4.7	3.2		2.5	2.5	3.0	2.5	2.8	2.4	
市政問題	3			5	7		1	1	2	1		20	3	7	2	5		
帝人問題及贈收賄問題	5.7			3.0	2.2		"	"	"	0.6		2.0	1.3	2.2	1.8	2.0		
その他(1)				4					1			6	2	2	1	1		
I 政治的方面計				1.3					2.3			0.6	0.9	0.6	0.9	0.4		
II 外交方面(2)				1	2							3			2	1		
III 軍部勢力の増大				0.6	0.6							0.3			"	"		
輸出工業、貿易問題				1	3				2	2		8	2	3		3		
軍需工業とインフレ問題				"	1.0				1.5	1.3		0.8	0.9	0.9		1.2		
配給組織問題				3	1				1	2		8	1	5		2		
農村問題				1.8	0.3				1.9	"		0.8	0.4	1.5		0.8		
その他(3)									"	0.6		0.8	0.4	1.5		0.8		
VI 經濟的方面計	(12)	(2)	(1)	(34)	(63)	(2)	(7)	(20)	(6)	(26)	(1)	(3)	(177)	(33)	(67)	(18)	(42)	
暴力團狩り	22.6	33.3	8.3	20.6	20.1	11.8	13.5	14.9	14.0	16.9	3.0	7.5	17.3	14.3	20.6	16.5	16.5	
自殺及殺人事件	1			1	3			1				6			1	3	1	
小林氏を中心とする興業界の問題	1.9			0.6	1.0			0.7				0.6		0.3	2.8	0.4		
チャーナリズムの諸問題	1			2	1			2	1	3	1	11	5	2	1	2		
婦人問題(廢娼、職業婦人、有閑婦人)	"			0.6	5.9			1.5	2.3	1.9	9.0	1.1	2.2	0.6	0.9	0.8		
思想問題				2	2				1	4	2	1.1	7	2	2	2		
國民の道德風習				1	1				1	1		2		1	1			
鑛山爆發問題及國民健康保險國際勞動條約批准				2	2				2.3	2.6	6.1	1.1	3.0	"	1.8			
社會的方面計	(2)	(1)	(9)	(6)	(1)				(3)	(6)	(4)	(32)	(13)	(10)	(5)	(2)		
大學ニ關スル諸問題	3.8			8.3	5.5	1.9	5.9		7.0	3.9	12.1	3.1	5.7	3.1	4.6	0.8		
學生問題及就職問題				1.2	2.2	11.8	1.9	0.7	7.0	1.3	3.0	1.9	2.6	2.8	1.8	"	"	
その他				2	3				1	1		0.8	0.4	0.9	"	"		
教育的方面計	1			1	2				1			4	1	2		1		
帝展改組問題	1.9			0.6	0.6				2.3			0.4	0.4	0.3		0.4		
宗教問題				1	1				1			4	1	2		1		
その他				1	2				1			8	1	3		2	2	
文化的方面計	(2)	(1)		(5)	(21)		(3)	(10)	(6)	(10)	(4)	(1)	(63)	(20)	(23)	(5)	(11)	
I-VII 國內問題計	3.8	16.7		3.0	6.7		5.8	7.5	14.0	6.5	12.1	2.5	6.2	8.7	7.1	4.6	4.3	
	2	1		3	19		9	4	9	3	1	51	16	20	4	8		
	3.8	16.7		1.8	6.1		6.7	9.3	5.8	9.1	2.5	5.0	7.0	6.2	3.7	3.1		
				2	2			2	4.7			4	2	1	1	1		
				0.6				3	1		1	8	2	2	1	2		
	(2)	(1)		(5)	(21)		(3)	(10)	(6)	(10)	(4)	(1)	(63)	(20)	(23)	(5)	(11)	
	3.8	16.7		3.0	6.7		5.8	7.5	14.0	6.5	12.1	2.5	6.2	8.7	7.1	4.6	4.3	
I-VII 國內問題計	(20)	(3)	(3)	(60)	(120)	(6)	(16)	(37)	(21)	(53)	(17)	(6)	(362)	(91)	(130)	(43)	(69)	
	37.7	50.0	25.0	36.4	38.4	35.3	30.8	27.6	48.8	34.4	51.5	15.0	35.4	39.6	40.0	39.4	27.2	

註 (1) 五・一五事件及び血盟團事件の判決に關するもの、婦人參政權問題及び所謂最近の吾國の非常時的情勢の諸問題を一括した。

(2) 吾國の聯盟脫退、人形使節及びアメリカの Garden Club 員の來朝の諸件を含む。

(3) 統制經濟問題、石油業法の發布及び民間航空事業の諸件を含む。

第十九表 附表の二

	職業別						總計	地位別			
	農	水産	工	商	交實	無職		無職	無職	無職	無職
(日、滿、支、蘇) (及、樺、東問題)	對滿政治外交問題	1.9	2.2	4.4	1.9	1.5	0.6	1.1	1.1	1.4	1.6
	VIII 日、滿經濟問題	1.7	1.2	1.3	2.2	1.5	2.2	1.1	0.4	1.2	0.9
	日、滿問題	1.7	0.6	0.6	0.6	0.7	1.3	0.7	0.9	0.9	0.4
	日、滿問題計	(3)	1.7	1.3	4.4	1.9	0.7	2.2	2.2	3.3	1.2
	IX 日、滿、支關係	5.7	2.4	3.2	10.0	3.9	3.0	3.2	3.0	1.5	3.1
	北支事變	7.7	2.1	4.2	3.3	1.5	3.8	2.4	3.4	4.4	1.1
	日、支問題	5.7	2.6	2.2	11.8	3.7	0.6	6.1	2.9	3.3	2.2
	對支外交親善問題		1.2	1.3	1.1	1.5	1.1	0.6	0.9	1.3	1.3
	支那問題計	(10)	1.1	3.3	10.0	2.4	1.7	1.1	3.0	3.9	2.2
	X 支那問題	18.9	3.3	16.7	17.6	29.4	21.2	17.9	18.6	16.9	15.2
XI 日露、日支蘇、樺東問題	(13)	(2)	(2)	(37)	(70)	(5)	(14)	(23)	(10)	(35)	
XIII-VI、日、滿、支問題	24.5	33.3	16.7	22.4	22.4	29.4	26.9	20.9	23.3	23.7	
								22.3	22.3	15.2	17.5
								22.6	(50)	(63)	(29)
								21.7	20.9	26.6	24.0

第十九表附表の三の示すやうに、歐米並に世界的な問題に關する學生の關心は、特に一二の問題に集中することなく廣く分布してゐる。しかしその内ドイツの爆彈宣言、伊太利エチオピア問題及び米國の NRA の崩壞の三つの問題に對する學生の關心が稍著明である。そしてこれ等の問題に對する學生の見解は種々ではあるが、その多くのものはドイツの爆彈宣言に就いては甚だしくドイツに對して同情的であり、伊エ紛争問題に就いては伊太利の帝國主義的政策を批判し、NRA の崩壞に就いては寧ろそれが當然であるとなしてゐる。素より紙數が許せばこれ等の問題の分析の結果を此處に示すべきであるが、これも省略することとし、左に前述の北支事變に關する學生の態度の分析だけを例示するに止めやう。

北支事變に對して興味を有したる一三八名の學生中、單に問題だけを指摘して何等の態度をも示さなかつたものが三六名あり、これを態度「不明」のものとして取扱ひ、その他のものゝこれに對する態度を具體的に第二十表に示す如く分析してみた。そしてその各々に就いて結局それが同事件に對して吾國の側から觀て是認的であり、進んでは吾政府並に特に軍部の行動に對して後援的であり、また稱讚的であるものを肯定的な態度と見做し、日本の態度を是としないものを否定的とし、特にその何れとも判定し難いものゝ、そしてまた同時に何等かの批判を含んでゐるものを批判的態度とし、最後に右の何れにも屬せしめ難く、單に事實を純客觀的に觀察せるものを客觀的態度としてこれを總括すれば、第二十表下段の結果を得る。そしてその各項の數字の百分比を前述の一三八名を總數としてその各欄に於ける實數に對して求めてみた。その結果に従へば北支事變に關して興味を有する學生の半數に近きもの

第十九表 附表の三

	業 別					無職	不明	總計	地 位 別			
	農	水	工	商	交				無職	業主	重役	社員
NII NRAの崩壊 其他(税制改革、米穀減産、動 比島獨力、學生の反戦運動) 米 國 計	2	3.8	4	4	2	3	1	22	9	4	2	4
	(2)	(2)	2.4	1.3	3	1	2.5	22	3.9	1.2	1.8	1.6
XIII ドイツ爆彈宣言 ナチス政府の 國內的諸問題 ドイツの軍備外交 計	2	2	1	4	2	3	1	6	2	1	0.9	2
	(2)	(2)	0.6	1.0	3	0.6	2.5	6	0.9	0.3	0.9	0.8
XIV フランス國內閣更迭 計	1	1	1	1	1	1	1	7	3	3	2	4
	(1)	(1)	1	1	1	1	1	7	3	3	2	4
XV 歐洲を本位の危機 (ベルギー平價切下げ)	1	1	1	3	2	1	1	7	1	1	1	4
	(1)	(1)	1	3	2	1	1	7	1	1	1	4
XVI 英國内閣更迭 計	1	1	1	1	1	1	1	7	1	1	1	4
	(1)	(1)	1	1	1	1	1	7	1	1	1	4

XVI ソヴェート(外交、五年 計、コンメンタル)	1	1	3	4	5	2	3	3	2	24	8	7	1	5
(1)	(1)	1.8	1.3	2	3.7	4.7	1.9	9.1	5.0	2.3	3.5	2.2	0.9	2.0
XIX 歐洲政治、外交準備問題 (XIII-XIX、歐洲計)	2	2	5	1	4	5	4	1	1	19	4	4	2	6
(2)	(2)	2.0	5.9	2	3.0	5	4	1	1	19	4	4	2	6
XX 軍 縮 問 題	17.0	16.7	6.7	13.1	9.6	19.4	11.6	14.3	22.5	13.3	15.7	11.1	11.0	14.6
(9)	(1)	(11)	(4)	(1)	5	26	(5)	(9)	(3)	(4)	(36)	(36)	(12)	(37)
XXI 各國の經濟問題 (世界恐慌、通商條約)	1	1	4	2	4	2	3	3	0.7	1.3	0.3	1	3	3
(1)	(1)	1.3	11.8	2	2	2	1.9	3	0.7	1.3	0.3	1	3	3
XXII リタリズム、國民主義の 擡頭(聯盟瓦解)	1	1	8	1	1.5	2	2	3	1.1	1.1	0.6	3	4	4
(1)	(1)	8.3	2.6	5.9	1.5	2	2	3	1.1	1.1	0.6	3	4	4
XXIII モダヤ人問題 (計)	1	1	0.3	1	4	4	3	1	0.7	1.3	0.3	1	1	1
(1)	(1)	0.3	1	4	4	4	3	1	0.7	1.3	0.3	1	1	1
歐米 (XII-XIX, XII)	(1)	(1)	(13)	(3)	(6)	(8)	(1)	(1)	(34)	(9)	(7)	(2)	(14)	
(1)	(1)	8.3	4.2	17.6	4.5	8	3.0	3.0	33	3.9	2.2	1.3	5.5	
世 界 (XX-XXI)	(1)	(1)	(12)	(3)	(6)	(8)	(1)	(1)	(33)	(9)	(7)	(2)	(13)	
(1)	(1)	(12)	(3)	(6)	(8)	(1)	(1)	(33)	(9)	(7)	(2)	(13)		

は明瞭に肯定的な態度を示して居り、僅かにその三分足らずのものが否定的であり、二割餘りのものが批判的であつて、客觀的態度を示せるものが四分、残りの約二割四分のものゝ態度は全く不明である。これを總體的に考察すれば、吾々は凡そ次ぎの如く云ふことが出来るであらう。即ち北支事變に關して窺知し得る學生の態度は最近時の吾國の政治、外交に於ける所謂強行政策に對して是認的であり、これを基礎づける最近時に於ける吾國の國民主

第二十表 北支事變に對する學生の態度

	業 別							總計	地 位 別		
	農	水	鑛	工	商	交	實		無職	業主	雇役
肯	1	1	1	5	4	1	2	4	4	4	6
否				1	1		1	1	1	1	1
批				1	3		1	2	4	2	3
客觀	1						1	2	4	1	2
肯		1		2	1	1	1	4	4	4	2
批								19	5	4	5
肯								2	1	1	1
肯				1				3	1	1	1
肯								2		1	1
肯								10	8	2	5
批	1			1	1			4	1	2	5

肯	批	客觀	客觀	客觀	計	業 別											總計	地 位 別			
						農	水	鑛	工	商	交	實	公	自	無	職		不	無職	業主	雇役
1	1				11	3	1	23	44	4	8	17	8	26	3	4	152	37	42	22	36
1	1				4	1		2	2	1		2		2		14	2	2	3	1	4
1	1				7	2	1	21	42	3	8	15	8	24	3	4	138	35	39	21	32
4	4				364	4	3	11	15	4	4	7	4	16	3	72	20	15	12	18	18
4	4				364	100	100	478	341	100	500	412	500	615	75.0	47.4	34.1	35.7	54.5	5.00	5.00
4	4				364			5	11		1	3	3	4	3	34	10	9	6	5	5
								21.7	5.0		12.5	17.6	37.5	15.4	100	22.4	27.0	21.4	27.3	13.9	13.9
								1	1		1	1		1		4	1	1	1	1	1
								4.3	2.3		5.9		3.8			2.6	2.7	2.4	4.5	2.8	2.8
								2	2		1	2				6	3	2	2	2	2
								18.2	2.3		12.5	11.8				3.9	4.8			5.6	5.6
								1	16		2	4	1	5	1	3.6	6	1.5	3	10	10
								0.1	36.4		25.0	23.3	12.5	19.2	2.5	12.7	16.2	35.7	13.6	27.8	27.8

義的思想傾向の影響が學生間に稍々強く反映されてゐる。

しかし云ふまでもなくかくの如き學生思想の傾向は單に右の北支事變に對して關心を有したるものに就いて確言し得る所であつて、それが學生全體に就いて如何様に現はれるかは不明である。

最後に筆者達の稍々不確實な所言ではあるが、時事問題に對する調査に際しての感想を附加することを許されたとすれば、吾々は次ぎの如く云ふことが出来る。即ち時事問題に對する學生の態度は種々であつて、その多くの場合には確定的な思想傾向を以つて彼等の態度を合理的に處理し難い、彼等の態度は多分に不合理的な要素を含んで居り、従つて感情的であり、時には青年らしく所謂正義感に強く、道義心に厚い。そしてまた時には青年學徒として自由の感を強く抱いてゐる。従つてこれ等の意識は理論的、思想的には時に一つの矛盾を暴露すると考へなければならぬ。このことは全般的に自己の生活態度を將來に決定し、自己の思想を理論化して行かうとする過程を歩みつゝある學生の寧ろ當然の姿であると云はねばならないであらう。

## 九

以上の調査結果を顧みて此處に簡單な結論を附加して置かう。

本論に於ける筆者達の目的は最初に述べたやうに、父兄の職業的差違並にその職業上の地位の相違、換言すれば、學生のこの家庭的環境條件が彼等の思想生活に如何に影響し、反映されるかを探及するにあつた。しかしこの筆者達の目的にも拘らず、積極的には此處に繰り返し指摘するに足る程の著明な結果は得られなかつた。しかもその反面に於いては消極的に、吾々は誠に重要な結果の一つに一步近づくことが出来たといつていい。即ち以上の吾々

の調査を見ると、吾々は其處に父兄の職業に依る家庭環境の學生の思想生活に對する影響を強く識別することは困難である。がこの影響が全然存しないと云ふことは出来ない。唯だその影響の出現が甚だ微弱であるに過ぎない。然らば何故にその影響が宛かも全く存しないか、若しくは存するとしても甚だ微弱にしか現はれないか、この點を吾々は考へて見る必要がある。これ等に對する筆者達の見解を簡單に記述すれば次ぎの如くである。

既に自己を發見しつゝある青年としての、筆者達の調査學生は、その生活環境の重要な一面である彼等に對する教育的環境の最後の段階としての大學生活、或は高等専門學校の生活に於いては、最も強く學園環境の影響の下に置かれて居り、この環境の作用はある程度まで強く過去及び現在に於ける彼等の家庭環境の影響を揚棄し、彼等の生活態度を部分的に平均化して行くものと思はれる。そして彼等の思想生活、或は彼等の社會的生活態度はこの學園環境を中心にして現實社會の諸状態と絶へず接觸を保ちつゝある。

更らに學生の思想生活の考察に際しては、前項末尾に述べたやうに、青年の感情的であり、従つて部分的には不合理的である所の意識の一面を忘却する譯けには行かぬ。

最近屢々一部の論者に依つて一面には現代學生の思想的混迷、彼等の思想的無自覺が傳へられ、他面では大學の轉落が云々されることがある。吾々も亦一部これ等の所論に耳を傾けなければならないのであるが、これ等の問題は更らに學園環境の影響を見て吾々の所見を新にすべきものであつて、此處に深く立入る必要を認めない。

### 附記

本来本論に於けるか如き問題は、調査の方法の如何に依つて、その結果に種々の相違を生ずるし、また今回の「學生生



活調査」の方法そのものに就いての慎重な科學的價值が加へられなければ、未だ調査の結果をそのまま信頼する譯には行かないことは云ふまでもない。しかもこの基本的にして重要な問題に對しては、殆んど全く本論中に觸れる餘蘊を持たなかつたが、それは筆者達がこの點を輕視したからではない。何れ調査の完成を俟つてこれを補つて行き度いと考へてゐる。従つてこの點に關して特に讀者の了解を得て置き度いと思ふ。

最後に本調査の整理に際して多大の援助をなされた大學院學生小古間隆藏君に厚く感謝の意を表すると同時に、都市社會事業研究會の多くの學生諸君にも同様の意味に於いて此處に感謝の意を傳へて置かねばならない。また本論の調査の二三の點に就いて御教示を賜つた同僚小島榮次教授に對して厚く禮を申し述べて此處に筆を擱く。

昭和十年九月二十日稿了。

## 徳川時代に於ける農村經濟の一端

野村兼太郎

本稿の目的とするところは、徳川時代に於けるある農村のある年の經濟生活を出來るだけ明かにして見ようと云ふにある。徳川時代の農村の負擔が如何なるものであつたかを説明する一端となすものである。ある期間に互つて、農村負擔の變化を研究する前提として、特にある一ヶ年を限定して、出來る限り、詳細に調べて見る必要があると考へたためである。故に本稿は次に發表する豫定である同じ村の負擔の動態的研究の序説をなすものである。唯この種の研究に最も困難を感じるのは、農村帳簿類の完全に現存してゐることが稀であること、それ等帳簿自體の不明なること、及び計算その他にかなり不確實な點が存してゐること等である。以下の研究もこれ等のために、多少推定を試みる必要があつたり、又私自身の無知から誤謬を冒してゐることも、定めし多からうと思ふから、偏に先覺諸氏の御叱正を仰ぐ次第である。